

---

# としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

熊川修

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

としよコイ。〜閉店営業図書室と、集いし若人たち〜

### 【Nコード】

N4681Z

### 【作者名】

熊川修

### 【あらすじ】

彼は今日も来訪者皆無な図書室にて、孤独な委員会活動に勤しんでいた。

しかしある日の放課後、図書室前の廊下にて一人の女子生徒と出会う。

彼女は出会って早々、なんとも不思議な疑問を彼に投げ掛けてきた。「トーストじゃないのですか？」と。

その日を境に、これまで閉店営業状態であった図書室に彼女が通うようになり、本の貸し出しまで行われるようになる。

そして彼らは一冊の本と出会った。  
舞台は現代。ちょっぴりおかしい日常系学園ストーリー。

## Prologue

その少女との出会いは、まったくの偶然であつた。

いや、運命というものが本当に存在するならば、それは必然の予定調和だったのだろうか。

彼女との初めての出会い、その場所は学園の図書室前の廊下だった。

彼女は問うた。初対面の彼に向かって。

普通の出会いであれば、おそらく訊ねる者はいないであろう質問をぶつけてきた。

「トーストじゃないのですか？」と。

彼と彼女が会話らしい会話したのは、図書室の中であつた。

正確には、図書室に備えられた司書室のテーブルを挟んで。

彼と対面の椅子に腰掛けていた彼女は、ひざの上に置いていたその本をテーブルの上に置いた。

そして最初の見開きページを開き、無表情のままでその小さな口を開いたのだ。

「この本は意味がわかりません」

少女はそうつぶやき、かれこれ数時間は眺め続けたであろうページを撫でた。

全ての本には、それが書かれた理由があつて然るべきだ。  
だけど、もしそうであるならば。

# 「？」の童話

表紙にそう記された、その本は。  
何のために、誰のために生み出されたのだろうか。

## B o r o n i a

季節は冬。

いつの間にか意味が履き違えられて恋人たちの祭典となったクリスマスが過ぎ。コタツにミカンでのんびりと過ごす正月を越し。またしても恋人たちの祭典であるバレンタインも視野に入ってきた二月の初め。

時刻は放課後、夕方前。彼こと、赤城高雄は学園内の図書室にて読書に勤しんでいた。あかぎたかお

市内唯一にして中高一貫のマンモス校である、ここ『呉野学園』くれのがくえんの高等部一年生……それが彼という人間の、現在の肩書きである。

「……暇だ」

なぜ図書室なのか。答えは簡単だ。彼が図書委員だから。そして今は図書委員の受付当番としてカウンターの中に座っているという、実に当たり前な理由からである。

おまけにこの場所はストーブを完備している。窓の外で極寒の風が吹きすさぶ中、室内プラス暖房器具というのはそれだけでもう極楽浄土。それに加え、この場所は非常に静かである。その静寂さは心地よく、本の中に広がる世界へ没頭するにはうってつけだ。

いや、図書室だから静かなのは当たり前だというわけじゃない……閑散としており、彼以外に誰もいないのだ。もっともそんなことは今に始まったことじゃなく、彼にとってはもう慣れたものであった。

「……暇だなあ」

彼は誰に話しかけるわけでもなく、もう何度目かわからないその言葉を思わずつぶやいた。

だからといって状況が変わるわけじゃない。そんな魔法が存在するならば、彼自身知りたいものである。広げていた本を閉じて、あくびを一つ。

受付は人が来ないためにやることが無く、本棚の整理はそもそも本が動かされていないのだから必要ない。新しい本の入荷などまだまだ先の話。いつものことではあるが、本当にやることが無かった。

彼は何をすればよいか少々悩み、結局何の答えもでなかったので引き出しからランプのセットを取り出してその作業を始めた。委員として不真面目だと目くじらを立てる人もいるだろうが、精密機械じゃないのだから四六時中マジメに振る舞っているには疲れ果ててしまう。たまには息抜き位いいだろうということだ。

「今日は三段目まで行きたいですねー……っ」と

指先に細心の注意を払い、彼はランプでタワーの建設を目指してカウンターの上にカードを立てていく。

図書委員というのは暇なのだ。他の学校は知らないが、少なくともこの学園に限っては忙しいという言葉とは程遠い。

この図書室に人が来ることは稀であり、受付の当番として毎日ここへ来る彼以外、誰も寄りつかないのがもはや日常。そのため委員としての仕事もほとんど無いに等しいのだが。

「二段目完成……っ」

震える手先を気合で黙らせ、いよいよ緊張感高まる三段目へと突入した瞬間だった。

本を読みに来る者など皆無な図書室の扉が、レールを外れそうなほどの勢いでもって開かれたのである。底抜けに明るい女子の声と共に。

「ういーっす！ 遊びに来てやったぞタカー！」

「あ つああああああ……！」

現実是非情である。どれほどの努力をして、それが報われるとは限らない。懸命に積み上げたものが、気まぐれな風によって吹き飛ばされることもままある。

たとえば、彼の目の前で崩壊したトランプのタワーのように。

「ぼ、僕のスカイツリーがああああ……！」

「なーにをこの世の終わりみたいに叫んで……なんだあ？ 一人で神経衰弱でもしてんのかオメー」

もはや怒る気力すら失せ、彼はただ深いため息をつく。

不可抗力だ。目の前の女子には悪意は無いのだから まるで修行僧のように自身にそう言い聞かせて。

だけでも少しだけ不機嫌そうに答えてしまふのは仕方ないだろう。

「ハルナさん……何をしにいらっしやいやがったんですか」

「んだよ、その言い方。用がなきゃダチのトコに来ちゃいけないっての？ 冷たいねえお前さんは……」



やれやれというジェスチャーの後に、彼女は手にしていたハンバーガーをひと口でたいらげる。

片手に提げている巨大な紙袋。その中には彼女がたった今食べ終えたのと同じ物がぎっしりと詰まっていた。

「いや、そんなつもりは……っていいの？　生徒会長がこんなトコで油売ってて」

「まだなつてねえんだから頭の新をつけろって。いいんじゃないの？　生徒会室で待ってたところで、どーせヒマなんだし」

「あつそ……」

適当な受け答えで会話を切り上げ、高雄はカウンター周辺に散らばったトランプ達を拾い集めていく。

すぐさま拾うのを手伝ってくれたのは、彼女の素の優しさからだろう。

出来れば扉を静かに開けるとか、彼としてはそっちの方で気を使っただけだったのだが仕方ない。

「ほい。これで全部か？」

「みたい……だな。ありがと……で、それは一体なに」

傍らに置かれた、いい匂いを漂わせるハンバーガー満載の紙袋を指差して高雄は尋ねた。

そんな彼に、彼女はきょとんと真顔で答える。

「オメエ……目、大丈夫か？　ハンバーガーに決まってんじゃない」

「そんなことは訊くまでもなく分かってる……僕が訊いてるのはだな」

「ああワリい。そういやチーズバーガーも半分くらい混ざってたわ」

「そこじゃないって……質問してんのはさ、なんでそんなに大量に、それもこの場所に持って来たかってこと」

質問し、それに答えながらも彼女は食べるという行為にストップをかけようとはしない。

それを止めたら死ぬとでも言うかのように、包みを広げては食べる動作を繰り返していた。

「大量ってまた大げさな……小腹が空いたから買って来て、ヒマだったから食べながらここに来ただけだったの」

「小腹……ねえ」

喋りながら食べ続ける。いや食べながら喋っているのだろうか。

まるで豆菓子でもつまんでいるかのような軽快さで……常人であれば一、二個で充分主食になるであろうそれを次々に飲み込んでいく。

もはや咀嚼そしやくしているのかすら疑わしいスピードであった。

「一応、図書室内では飲食禁止なんだけど」

「いいだろべつに。読みながら食べてるワケじゃねえし、ゴミはちゃんと片付けるからさ」

「しかし生徒会長が校則を守らないってのも……」

「新をつけろっての……かてえこと言うなって。あれだ。会長特権の前借りってやつだ」

自分が言った台詞が面白かったのか、彼女はケラケラと笑い、そして食す。

彼女はいつもこうなのだ。食欲旺盛で天真爛漫。彼女のために生まれた言葉ではないかと思えてしまうほどだ。

葛城榛名<sup>かつらぎはるな</sup>というその女子生徒は、高雄より一つ上の先輩にして幼少時からの幼馴染である。

そして彼らの会話で話されるようにこの春から彼女は最上級生となり、さらに高等部の新たな生徒会長となることが決定している。

同年代の平均身長内に納まっている高雄を軽々と越える、百八センチ近い高身長。

がさつで喧嘩っ早く、並の男子よりもよっぽど男らしいかもしれない。

けれどその見た目は内面に反比例するかのように実に女性のそれである。

腰まで伸びる、彼女の元気を現したようなハネ気味の茶髪。

パツチリとしていて凜々しい表情を良く映す瞳。高身長と相まってモデル顔負けのプロポーション。

高雄と一年しか変わらない年齢でありながら、既に外見のあらゆる要素が大人の女性として固まっていると言っている。

無論、外見のみで生徒会会長などになれるほど甘くはない……けれど彼女はまるで人の上に立つために産まれてきたのではと思うほ

どの、天性のカリスマとでも言うべき厚い人望を得ていた。

それに加え、これまた天性のと言える生徒会期待のブレーンまでが彼女の味方なのだから、学園内選挙での勝利は約束されていたようなものである。

「なんだよタカ。なんか元気ないぞ？ ……あ、もしかして腹減ってんのか。食うか？」

「いや、いい。ハルナを見てるだけで、もう胃もたれしそうなほど……」

「ハンバーガーのピクルスと、チーズバーガーのピクルス、どっちがいい？」

「両方もれなくピクルスじゃないか……ありがとう。いらないよ」

「そっか……だったらさ、遊ぼうぜー。暇で死にそうなんだよあたし」

会話を切り上げてトランプ片手にカウンターへと戻ろうとする高雄だったが、彼女がそれを逃がすはずがなかった。

カウンターにうつぶせて、まるで幼児のように駄々をこね始める。これもまたいつものことではあるが。

「ハンバーガーに夢中になってればいいんじゃないの？」

「じゃあ食べながら遊ぼう。よし決定っ……ババ抜きからいくか」

気付いたときには高雄の手からトランプの束は姿を消していた。ハンバーガーを食べるという行為は持続しながらも、気付かれるこ

となく瞬間で奪い取るという　まるで忍者のような気配の消し方だと高雄は思い、そしてため息をつく。

「はぁ……いいの？」

「あん？　何が……あ。実はお前、『トランプの魔人』とか巷で噂されるほどで、そんな俺の真の実力を出していいのか？　とかそういう……」

「どんな魔人だ……違うって。生徒会の会議が何か脱け出して来たんでしょ？　ここで遊んでていいのかっていう意味だよ今は」

「あたいがいなくなたって問題ねえだろ。ダメだったら探しに来るだろーし」

追いかけられる前に仕事するべきだろうと、誰しもそう思うだろうが高雄はそう言わなかった。

彼女は昔からそういう人だ。自分が思ったこと、やりたいことを好きにやってきている。

そしてそれに対する叱責すら楽しんでいる印象である。けれどその実、いざという時には彼女ほど味方になれば頼もしいと思える人間もそうはいないだろう。

注意だけはされないよう、最低限のことは　最低限のことしかない高雄にとっては、少なからず憧れを抱いていた部分ではある。しかしそんな憧れも、今ではもう彼は諦めた。

自分は自分、彼女は彼女だと。彼の中ではそれでいいということにしてある。

「んじゃ始めつか。まずタカが『ババ』な」

「……すみませんがババ抜きルールから勉強し直してもらえますかね」

「んじゃあ『ババ』無しのババ抜きすつか？」

「それもうゲーム違うから……ババ無いから」

「っコラア！ やっぱりここにいた！」

出入り口方面から突如響いた少女の怒号に、二人とも身体を強張らせて振り向いた。

静かな室内に雷鳴を走らせ、二人の耳を軽く痺れさせたその女子生徒。

乱れなく足元へ伸びる長髪をなびかせ、彼女は眉間にシワを寄せた険しい表情のまま、彼らのもとへと歩み寄っていった。

## B o r o n i a 2

「あだだだだあっ!？」

榛名が悲鳴 いや、そんなに女の子なものではない。どちらかといえば男らしい痛がり方で声をあげた。

たった今入室してきた女生徒に、問答無用で片耳をつねりあげられた為である。

「ハルナあ……すぐ帰って来るって飛び出してから何分経ってると思ってるのよ! しかもこんなところで油売って……!」

「いつでえよ! 痛えつての!」

「ま、まあまあ、ミユキ。そんな怒らなくても……」

「あんたは黙ってて。これは生徒会内の問題」

「あ、はい……」

眼鏡の奥から向けられるその鋭い眼光と静かな気迫に、高雄は思わずたじろいだ。

高雄と榛名、双方にとって幼少からの幼馴染

あまぎみゆき  
天城深雪は、ま

さに才女と呼ぶに相応しい女生徒である。

座学であれば成績は常に学年ベストスリー。教師達からの信頼も厚いが、それに毎回応え得るだけの能力を有していると言っている。高雄と同じ高等部一年生。まもなく二年に上がるが、既に生徒会

きつてのブレーンにして頼れる会計役。

知的さを漂わせる銀縁の眼鏡、その奥にはやや鋭い目尻に茶の眼。緑がかった鈍色にぶいろのロングヘアーには少しの乱れもなく、全ての毛先がスラリと地に向かって伸びており、髪型の名称こそ榛名と同じだが、両者のそれはまさに性格を髪質に表したかのようである。身長は高雄よりやや低い程度で年頃の女子らしい華奢な体格。しかしその雰囲気からは、榛名とはまた別のタイプで物怖じしないであろう内面の強さを感じさせる。

それが彼女という人。その肩書きと成績に外見。名は体をあらわす……ではないが、彼女は『デキる女』の風格を存分に放出していた。

もつとも現在は、その整った顔立ちも憤怒によって崩れてしまっていたが。

「三年生を送る会での送辞……あんたがいないと練習始められないでしょうが！」

「いだったっ！　だ、だってその前の会議が長引きそうだっていうから……！　ハラ減ったし……」

「なら買うもん買ったらすぐに戻って来なさいよ！　ここに寄る必要はないでしょうが！」

「いやその、暇だったんで遊びたかったっていうか痛え痛え痛えって！」

好ましくない形で一気に賑やに。それどころか騒がしくなった図書室内の空気に、高雄はため息をつくしかなかった。この2人のや



りとりもまた、いつもの見慣れた光景であるが。

「とにかくさつさと戻るわよ！ 皆待ちくたびれてるんだから」

「だああ、わ、わかったから耳は放し……いででえっ！」

「じゃあね。お邪魔したわ」

「あ、ああ……うん」

別れの挨拶にはあまりにも鋭い 拒絶にも似たトーンで短い言葉を残し、深雪は図書室の出入り口へと向かった。榛名の耳をつねりあげる右手はそのままに、だが唐突にその足は止まった。

「あ そうだ」

何か言い残したのか、それとも思い出したのか。深雪は扉に手をかけた瞬間に首から上だけを高雄へと向けた。傍らで未だに悲鳴を上げている榛名のことは無視したままで。

「この前の話だけど」

「……悪いけど、返事は同じだよ」

「……そう」

こちらも拒絶 用件を彼女の口から聞く前に、高雄が断りの返答を返した。その顔色には嫌悪というより、無情。何かを諦めた時の表情が、最も今の彼に近いのかもしれない。

そんな彼に、深雪もまた感情を動かすことなく答える。少なくとも

も表面上は。

「自分で　自分の可能性を潰すのね。あなたは」

「……買ってくれるのは嬉しいけど、僕に可能性なんてないよ」

「いいわ。また訊くから　行きましょ、ハルナ」

「そ、それはいいけどいいかげん耳を放し……あだだだっ！」

榛名は抵抗するが、ようやく捕まえた獲物をみすみす逃すほど彼女は馬鹿ではない。引きずって行くのにも近い状態のまま、深雪は図書室を後にした。

「……ふう」

高雄はため息をつき、テーブルと床に散らばったランプのカードを拾い集めていく。平時の状態に戻っただけであるが、閑散とした図書室内の空気は暖かくもどこか重たいものがあつた。深雪の雰囲気伝染したのだろうかと思ふ。

「あ」

カードを束にしていく途中で、彼はそれを目にして気付く。榛名が手にしていたハンバーガー入り紙袋が、椅子の上に置かれたままになっていた。大量のそれはジャンクフード独特の油臭さを未だに放ち続けている。

榛名が取りに来るかとも一瞬考えたが、おそらくそれは無いだろうと思い直した。鷹に捕らえられた小動物のようなものだ。仕事が終わるまでは生徒会室に閉じ込められ、取りに戻って来れる暇も隙

も与えられないに違いない。

「……仕方ない、か」

かといってここに置いたままというのも図書室という場所からして問題があるし、後でグチグチと小言を言われるに違いない。相手はあの榛名なのだ。「食べ物の恨みは恐ろしい」とよく言うが、彼女の場合は特に恐ろしいものになるだろう。

高雄は再びため息をつき、ズッシリと重たい紙袋を持ち上げる。現状でこれを届けられるのは自分だけだという事実の前に仕方なく、本当は生徒会室にあまり近付きたくはないという心情は我慢するしかなかった。

「よ……つと!？」

「きゃっ」

その接触が起きたのは高雄が図書室の扉を開き、廊下へと出た瞬間である。

周囲への警戒など微塵もしていなかった彼は、ちょうど図書室の入り口前を通りかかったらしい小柄な女子生徒に激突してしまった。彼女が尻餅をつき、手にしていた鞆の中身 教科書やノート類が床の上に散らばる。

「あ、ああ……ご、ごめんっ」

罪悪感と恥ずかしさ、それに焦りが加わった謝罪を口にし、高雄は廊下に散らばった彼女の私物を拾っていく。途中で、先に彼女の身体を気遣うべきだったかと思っただが、何事も無かったかのように立ち上がりスカートの後ろをはたいている様子を見ると、どうやら

怪我などはしていない様子で一安心した。

「悪かったよ……うっかりしてて」

「いえ。私の方こそ不注意でした」

拾い集めた彼女の私物を手渡し、改めて謝罪の言葉を口にしたところで彼は初めて目の前の少女、その容姿を認識した。そして瞬時に目を奪われた。

まだ幼さこそ残しているが、整った顔立ちと艶やかな藍のセミロングヘア。まさに少女と言える小柄で華奢な体格と、どこか神秘的ですらあるその雰囲気。良い意味で、「まるで人形のような」という言葉が浮かぶ。

加えて短い言葉ではあったが平坦で……ともすると無気力ではないかという、鈴の音のように透き通り　されど感情を微塵も感じさせないその声もまた、印象的で耳に残るものであった。

「あの」

「え……あ、ああごめん……」

彼女に受け取らせておきながら、高雄はその手をノートと教科書の束から離していなかったことによりやく気付いた。その少女に見とれてしまっていたせいだろう。

彼は主に恥ずかしさから、顔を赤く染めた。差し出し、渡しておきながら自分は手を離さないなど、相手から見れば滑稽なことこの上ないはずである。

だが目の前の少女は、高雄を不思議がることはせず……どころか、彼が提げていた紙袋の側へとその視線を向けていた。無言のまま、無表情のままで。

「あ……えつと、その。これは……」

彼はたじろぎ、どんな説明をしたらいいものかと考えた。いくら閑古鳥が鳴いているとはいえ、一応図書室内では飲食禁止なのだ。図書委員である自分が大量のハンバーガーを手にもその部屋から出てきたというのは、うまく言い訳をしないと問題にされる可能性がある。聞いた話では紙袋の中の半分程度はチーズバーガーだとか、そういうことは至極どうでもよかったが。

「んと……これはさ、俺が食べてたとかじゃなくて、さっきまでここに……」

緊張と焦りのせいかうまく言葉が見つけれず、しどろもどろになってしまっている高雄の前に、少女はその小さな口を開いて問うた。無表情極まりなく、眉一つ動かすことなく。

「トーストじゃないのですか？」

「……はい？」

これには思わず高雄も聞き返さざるを得ず、呆氣にとられた。おそらく十人が十人同じような反応を示すだろう。それほどにその少女が口にした質問の内容は唐突で、予想外で、そして謎に満ち溢れたものであった。

「失礼しました。こちらの話です」

「あ、ああ……そう」

失礼であつたかどうかすら高雄には判別出来なかつたが、少女はペコリと頭を下げた。容姿のみならず、その仕草一つすら可愛らしいと言える。表情は相変わらず少しも変わっていないが。

「あ　そうだった……」

目の前の少女にまた目を奪われそうになったとき、自分がなぜ大量のハンバーガー入り紙袋を手提げているのかを思い出して我に返ることが出来た。

「ぶつかつてごめんね。ちょっと急いであるから、これで……」

「そうですか。拾つていただいてありがとうございました」

「いやいやそんな……それじゃあ」

適当な挨拶を済ませ、その少女と別れた高雄は早足で生徒会室へ向かつた。彼女から最後にお礼の言葉をもらつたが、嬉しさや恥ずかしさよりも戸惑いの方が大きかつた。彼女の荷物が落ちたのは自分が転ばせたためだというのもあるが、無表情で感謝されるというのはおそらく初めての経験だつたためである。

（綺麗な娘だつたけど……）

先ほどの謎な質問など……気になるところは多々あつたが、それ以上に彼女が着用していた制服のことが高雄には気に掛かつていた。見覚えがあり、どこか懐かしい女子の制服。忘れも間違えもしない、あれは中等部の女子制服だ。スカートの色から察するに、おそらくは中等部三年生……ようするに一つ下の後輩ということになる。

だがそうなると、なぜ彼女がここににいるのかという次なる疑問が

浮かぶ。

この学園は中等部と高等部で学棟が違い、それぞれで完全に独立している。だから中等部の生徒が高等部の学棟を訪れる必要はないはずだし、その逆もまた然りである。高等部の生徒に知り合いでもいるのだろうか。

(……もつけないし)

階段を下りる手前で振り返ってみたが、既に彼女の姿はなかった。廊下の向こう端まではそれなりの距離があるはずだが、まるで幻でも見ていたかのように綺麗に消え去ってしまった。

「……ま、いいか」

ひとりごとを口にし。それ以上詮索する気も起きず、面倒くさいという気持ちを態度にしたような気だるさで、高雄は重たい紙袋片手に階段を下り始める。

忘れ物のハンバーガーを届けた先で、飢えた榛名から泣きそうな勢いで感謝されるとまでは想像していなかったが。

翌日。

トイレを済まし、水洗いのために痛みを感じるほど冷たくなった指先を温めつつ、高雄は図書室へと戻ってきた。

無論、急ぐ必要など微塵もない。今日もこうして図書委員として貸し出し係を務めてはいるが、来訪者など皆無。本を借りたり読みに来る生徒どころか、司書教員すら来ないという状況。張りきって取り組む方が馬鹿らしいというものだ。

「ようタカ。遊びに来てやったぞー」

「昨日の今日でまた来たの……」

扉を開けた先に居たのは来訪者。ただし読書の「ど」の字もない、発言通り本当に遊びに來ただけの榛名であった。そして片手には当然と言わんばかりに食べかけのハンバーガーが握られている。

「なんだよおー……いつから図書室は『葛城榛名お断り室』になっただんだ？」

「そういうワケじゃないけどさ……いいの？ 生徒会の方は」

「ああ、なんか会議してるよ」

「……またミユキが怒り狂って探しに来るぞ」

「へへっ。今日は秘密兵器を持って来たのだ……見ろコレ」



半分以上は残っていたハンバーガーを軽くたいたら、自信満々と  
いった表情で彼女はそれまで耳を覆い隠していた長髪を捲り上げる。  
覗き出た綺麗な首筋に高雄は少しだけ心拍数が上がる感覚を覚えた  
が、次の瞬間には彼女が自信を持って見せびらかしたソレに気付き、  
軽く呆れていた。

「……なんだそれ」

「見てわかんねえか？ あたいが発明した、『ミユキ撃退兵器第十  
八号』だ！」

「……はあ」

高雄は生返事するしかなく、あらためてその兵器とやらを見つめ  
た。彼女の両耳をガツチリと挟んでいるそれは、本来なら洗濯物を  
干す際などに使用される留め具。いわゆる『洗濯ばさみ』というや  
つだ。

もっとも目の前のそれには、セロハンテープでいくつも画鋲が貼  
り付けられており……まるで小さなハリネズミのようである。

「……何をどう思ってこんな物を？」

「あいつ、いつもあたいの耳引っ張って連行するだろ？ つーこと  
でこの兵器の出番ってワケだ。何も知らずに耳に手をかけようとし  
たら……トラップ発動！ プスリってカンジで」

「……たぶん、ミユキなら触る前に気付いて「自分で外しなさい」  
でお終いだと思うけど……っていうかすでに耳が痛いんじゃないか  
それ」

「痛えよ？」

「……外したら？」

「そーだな……仕掛けるのはあいつが来てからでもじゅうぶ痛つええええええっ!？」

策士、策に溺れるとはまさにこのことであろう。

彼女は自分で仕掛けたトラップに見事にはまってみせた。言っていた通りまさにプスリと。

「そんなに画鋏だらけにするから……」

「ふ……ふふふ。これでこの兵器の破壊力は証明されたな。イテテ……」

指の腹からプクリと滲んだ血を舐めとり、今度こそはと慎重に外しにかかる。だがほとんど隙間なく貼り付けられた画鋏の針山を避けてそれを取り外すのは困難を極め、ついに力づくで はじくようにして無理矢理取り外した。もちろんそれはそれで耳に痛みは走るのだが。

「うおおおっ！ 外すのも痛ええっ!？」

「当たり前だよ……」

馬鹿馬鹿しく、されど彼女らしい感情豊かなリアクションに高雄は再びため息を吐き、適当な本を選んでカウンターの内側へと腰掛ける。

しかし縦横無尽というか、切り替えが早いというか。両耳を押さえて痛みに声をあげていた榛名は、次の瞬間にはオセロ盤を手に嬉々とした表情で近付いてきていた。

「さーて。遊ぼうぜ」

「あのさ……ここ一応図書室。本を読む場所なんだけど」

「硬えこと言うなってば。あたいが黒な。たしか黒が先行だよな？」

「そうだけど……っていうか人の話を」

「んじゃあまずココな」

「……いきなりカドを取りやがりますか」

オセロの神様　もしそんなものがいれば泡を吹いて卒倒するか、火山のように怒り狂うかの二択であろう。真っ向からルール全否定な初手である。もちろん当の彼女に悪気は無いのだが。

「ふっふっふ。まさに『神の一手』ってやつだな」

「『神さまも激怒する一手』の間違いだろ……っていうかそれルール違反だからさ」

「んだよメンドくさいな……じゃあ黒い駒だけにして勝負すつか」

「どっちが自分のか分かんないだろそれ……あ」

「……なんだよ？　なにをポカーンと　おお？」

まるで夫婦漫才。そんないつもの会話に興じていた二人であったが、突発的にその状況に変化が生じた。来るはずなどないと思い込んでいた、図書室への来訪者の登場である。

それは榛名を連れ戻しに来た深雪でも、ましてや滅多に来ない司書教員でもなく。

「どうも」

昨日の放課後、図書室前で高雄が衝突した少女 中等部の女生徒、その人であった。

「あ 昨日の」

「なんだ。タカの知り合いか？」

「いや、そこまでじゃないかもだけど……」

出入り口の扉を後ろ手に閉めたきり、微動だにせずちよこんと立ち尽くすだけの、その少女。何か興味深いものがあつたのか、やや鋭さのある眼差しで高雄と榛名を見据えたきりその視線を動かそうとはしなかった。その表情は昨日と同じく、まったくの無表情で。

「質問させていただきたいのですが」

「は、はあ……何でしょう？」

高雄が思わず畏まった返答をしてしまったのも無理はない。その少女が発した言葉は丁寧なことこの上なく、しかし抑揚の感じられない、およそ感情というものを溶け込ませていない声色であったか

らだ。よくできた機械音声のそれに近いかもしれない。

「中等部の生徒がこの図書室を使用することに、何か問題はありますか」

「え えつと……ど、どうなんだろう？」

淡々と必要な言葉だけを紡ぐその声、その雰囲気、高雄は面食らったような感覚を覚えた。そもそも本来の利用者であるはずの高等部の生徒すら全く利用していない図書室である。そのような質問が来ることも、そんな状況が来ることも、一切予想出来ていなかった。

「……いーんじゃねえの？ べつに」

助け舟を乞うよりも先に どこから取り出したのか、そもそも今何個目なのかわからないハンバーガーを口にしつつ、榛名がそう答える。それは決して英断の類ではなく、まったく悩みなどしなかったであろうあっけらかんとした返答だった。

「で、でもさ……中等部にも、図書室はあるけど……？」

「いえ。こちらの図書室を使わせていただきたいのですが」

決してこの場所を使うなということではないが、確認の意味で高雄はそう尋ねてみた。わざわざ棟を隔てたこちらの図書室を使わなくてもいいのではないかと。

しかし彼女はそういう質問を予測していたのか、即座にして端的に返答してきた。

「そ、そう……まあ、問題はない……よね？」

「だから無えってば……たえあつても、あたいが許す」

会心の微笑みで親指を立てる新・生徒会長。「味方にすれば頼もしい」とは、まさに彼女のことだろう。カリスマ的な人望があるのも頷ける。

「じゃあ……いいよ。」自由」

「どうも」

感情が表情に表れないから推し量れないが、少女は二人に頭を下げ、ほとんど足音を立てず隅の本棚へと向かっていく。

そんな彼女の様子を観察しつつ、二人はヒソヒソと小声で会話を続けた。

（なんなんだあの娘は……おいタカ。あんな可愛い彼女がいるんなら紹介しろよコンニャロめ）

（どこをどう妄想したら彼女になるんだよ……昨日初めて会ったばかりだったの。名前も知らないし）

（ってことはあれか。あの娘は純粹に図書室使いに来たってわけか……いやあ、最近の若いモンはようわからんのお）

（自分だって若いだろうが……おお、本を持ってテーブルについたよ。それも五冊も……）

彼らの声は聞こえていないだろうが、それ以上にあの少女にとっ

て高雄達など興味の対象外なのか。二人の側をチラリと見ることも無く、少女はただ手に取った本にのみ視線を向けていた。無表情のまま静かに、ただページをめくる音のみを図書室内に響かせている。

(……表情変わんねえな)

(……それに読書家だね。かなりの)

およそ十数分の時間が過ぎた。しかし状況は何も変わらない。高雄と榛名は尾行者のように、注視し過ぎないよう少女の様子を観察し。観察対象とされたその少女は黙々と目の前の本を読みふけている。

(だ……ダメだわ。あたい、こういうシーンとしてピーンとした雰囲気二ガテだ……あんぐ)

(……僕だって苦手だよ。人がいるのに静まり返ってるのは耐えられな　ってというかそのハンバーガー何個目でどっから出したんだよ)

(ああ　もうダメだ……あたいは逃げる。これなら生徒会室にいた方がまだマシだ)

静寂の中で読書に勤しむ利用者だけが居るという　図書室本来の状況のはずなのだが。咳をするのも躊躇ってしまいそうな場の張り詰めた雰囲気、榛名は堪らず音を上げることとなった。自由人であるが故の、気安い離脱宣言である。

(ちょ、ちょっと待った　この雰囲気、僕だけ残していくのか！？)

（オメエは図書委員の当番だろ……しっかりと務めを果たしな。骨はしゃぶってやつからさ。　　じゃなっ）

（人をフライドチキンみたく言うな……っ！　って、ああ……ホントに行っちゃったし）

孤立無援。敵はいないが四面楚歌。

デパートのおもちや売り場で泣きながら駄々をこねていたら、いつの間にか親に置いて行かれていたような……寂しさと不安と戸惑いが入り混じった感情。

「……………」

出来ることなら、榛名と同じく高雄もその場から逃げ出したい衝動に駆られていた。しかし榛名に言われた通り、彼は図書委員の当番なのだ。

最低限、与えられた仕事には責任を持つ。

そうやって生きてきた彼にとって、易々と当番活動を投げ出すことはちつぽけなその良心が許してくれない。

仕方なく彼は散らかされたままのオセロ盤を片付け、最も近くの棚に鎮座していた適当な小説を手についた。タイトルも作者もこの際どうでもよく、それなりの分厚さ　読み終えるまでにある程度の時間が掛かってくれる本なら、なんでも構わなかった。ただこの室内の空気から、意識を逃避させてもらうためだけに読み始めるのだから。

「……………」



互いに、手に取った本の世界にのみ没頭する時間 図書室本来の風景となつてから、およそ二時間が経過した。

下校時刻を知らせる鐘の音がスピーカーから響く。これ以降は委員会での用事などで事前に申告し、許可されていない生徒の居残りは許されていない。

無視しようとしても校舎を片っ端から巡回する風紀委員に捕まれば、口やかましいお説教のフルコースを味わうハメになってしまう。

「……えと、時間ですので」

高雄は遠慮がちにそう口にした。緊張で少ばかり声がうわずいてしまったのは仕方がないだろう。なにせそんな図書委員らしい台詞を喋ったのは、これが初めてのことだったから。

テーブルの端で数冊の本を読了し、さらに次なる本を読みふけていた少女は彼の声を合図に席を立つ。そして積み上げていた読み終えた本たちをテキパキと棚に戻し、読み途中であつた一冊の本を手にカウンターへと近付き、抑揚のない声で一言。

「お願いします」

「……え。借りるの？」

無表情、無言のまま。手にしていた分厚いハードカバーの本をカウンターへと差し出して少女はコクリと頷く。

高雄が思わず、間の抜けた声で聞き返してしまったのもまた、無理もない。貸し出しの利用どころか図書室の利用すら、今までなかったことなのだから。

「え、えっと……ちょっと待ってね」

慌ててカウンター上のノートパソコンを開き、図書室の貸し出し管理ソフトを立ち上げる。図書委員になって一年近く経つが、最初に練習で起動した分を除けばこれが初めての使用ということになる。まさに無用の長物と化していたこのソフトに、使われる日が来ようとは思ってもみなかった。

使用方法をかるうじて覚えていたのは幸運としか言いようがない。少女から学生証を借りて学生番号を入力し、次に貸し出す本のバーコードを読み取らせる。

緊張と少しの感動を隠しつつ、どうにか失敗なく初めての貸し出し作業は終了した。

「どうも」

手続きの終わった本を受け取り、それを丁寧に鞆へとしまつて一礼。

彼女の表情は終始変わらぬまま、静かに図書室を後にしていった。

「……ふうー」

周囲を包んでいた重苦しい空気が途端に消え失せ、高雄は腹の底から深呼吸をした。

やり遂げた　まさにそんな表情である。

図書委員となつて一年近く。たった一人、たった一冊の貸し出し本とはいえ、ようやく委員らしい仕事が出来たのだ。達成感と満足感を感じずにはいられなかった。

しかしいつまでも愉悦に浸かっているわけにもいかない。彼は風紀委員が見回りに訪れる前に片付けを終え、図書室を後にした。

「……あ」

貸し出し作業に夢中で、あの少女の名前をしつかりと確認して  
なかったことに彼が気付いたのは、校舎を出た後であつた。頭の中  
の映像を再生してみても、深い霧に覆われてしまっているようでど  
うにもハッキリしない。しかし彼は、さほど後悔はしていない。

初めて図書室、貸し出し本が利用された そんな小さな喜びだ  
けで、今日のところは充分だ。

今夜はきつと、夢見が良いだろう そんな予想をしつつ、彼は  
いつもより少しだけ軽い足取りで帰路へとつくのだった。

## Mirabilis

高雄が図書委員となつてから初の……もしかしたら、この図書室としても初ではないかという　ちよつとした事件にも匹敵しそうな、一人の女生徒による本の貸し出し作業から数日が過ぎた。

その間に起こつた変化は、特には無い。強いて言うなれば図書室に通い詰める、彼女の貸し出し履歴が日毎に増えていったことぐらいか。そして今日も放課後になるとすぐに彼女はこの図書室へと現れ、もはや指定席となつたテーブルの一番端にて読書に勤しんでいる。

「……………」

そしてそんな彼女の様子をカウンターの内側から横目で観察する高雄の姿も、もはや日常風景。

しかしいくら観察していても、その対象である彼女は何も変わらない。その表情も、姿勢すら崩すことなくただ黙々とページを読み進めていくだけ。

時折見せる垂れ下がった髪の毛をかき上げる仕草には少々ドキリとさせられるが、変化といえばその程度である。

ただ時間を潰す為だけに開いていた小説を閉じ、高雄はカウンターのパソコンへと視線を移し指を動かした。

貸し出し本の管理ソフトを立ち上げ、マウスを操作。カーソルを『貸し出し履歴』の欄に合わせてクリック。探す手間など無い。彼が図書委員となつてからこの図書室の本を借りていった者など、彼を含め二人しかいないのだから。

自身では無い方の氏名欄を選択すれば、彼女の氏名と学年にク

ス、それにここ最近の借りていった本の題名が表となって画面に表示された。

霧島朝日 きりしまあさひ

それが数日前からここに通い始め、目下のところ高雄を除いてこの図書室唯一の利用者である、あの少女の名前。学年は中等部三年生、つまり高雄にとっては一つ下の後輩ということになる。だからどうという訳でもないのだが。

委員特権もこの程度にしておこう、と。彼はそう判断し、パソコンの画面を待機状態へと戻した。どこぞの捜査官じゃないのだし、これ以上私的な探究心から個人情報覗くのも悪い。見つからなければ犯罪にはならないとはいえ、程度というものがあるのだ。罪悪感だつて少しは感じる。

同時に下校時刻を知らせる鐘の音が響いた。それを合図に彼女は霧島朝日はテーブル上に積み上げた本をそれぞれの棚へ静かに戻していく。そして先ほどまで手にしていた、読み途中であつた本とカバンを手に高雄のもとへと近付いてくる。

「お願いします」

感情が何も込められていないようで抑揚がなく、だからこそなのか透き通つた声を彼女は口にした。

カウンター越しに差し出された本を受け取り、裏表紙に貼り付けられたバーコードをパソコンに読み込ませて貸し出しの手続きをする。彼女は借りた本を翌日の放課後に必ず返してくるから、返却期限は何日までだと説明する必要も無い。処理が終わつた本を、彼女の手へとカウンター越しに渡し返す。

「どうも」

彼女は受け取った本をカバンにしまい、無表情のまま礼を口に  
して、微かな足音だけを残して静かに図書室を後にする　もはやこ  
こまでがテンプレート。この図書室にとっての、いつも通りの光景  
と化していた。

「よっ……と」

高雄はカウンターの椅子から立ち上がり、窓の施錠を確認。自身  
が読んでいた本も棚に戻し、荷物をまとめて帰り支度をした。今日  
唯一の仕事をした管理ソフトを終了し、パソコンの電源を落とす。  
忘れ物がないことを確認してから出入り口の扉へと向かう。

(……今日もあの娘だけか)

放課後の約二時間。その間に図書室へとやって来た生徒は常連で  
ある彼女だけだ。本の貸し出しを利用するのもまた然り。

決して嘆いているわけではない。さほど情熱を燃やしているわけ  
ではないが、一応図書委員としては虚しくないと言えは嘘になる。  
しかし熱心に毎日通ってくれている生徒が一人いるだけでも感謝す  
るべきだろう。これまでの来訪者といえば、ただ暇つぶしに訪れる  
榛名と彼女を捕まえに来る深雪だけだったのだから。それに比べれ  
ば状況は好転していると言えるはずだ。

彼はもう一度振り返り、室内に誰もいないことを確認してから電  
気を消した。それまでも寂しかった図書室が余計に寂しくなったよ  
うな感覚を覚えつつ、扉を閉めて施錠し、その日は帰路についた。

静かに、だが唐突に変化というものが訪れたのは、翌日の放課後  
である。

今日も今日とて、放課後の図書室は静寂な空間。耳に届くのはストーブの燃焼音と、互いに手にしている本のページをめくる音のみ。室内に居るのは図書委員である高雄と、常連者となつた朝日の二人。つい先ほどまでなら遊びに来た榛名も頭数に含まれていたが、やはりこの重苦しい雰囲気になえきれないとのことで、朝日が訪れて早々に退散していった。

（相変わらず……）

図書室の状況についてもそうであるが、どちらかといえばカウンター越しに見る朝日に対し、彼は胸の内ですばやいた。テーブルの最奥、いつも通りの定位置にいつも通りの様子で黙々と本を読む彼女。しかしいつもと変わらない状況のはずなのに、高雄はその状況にどこか違和感を感じていた。

（いや……積んでない、よな？）

違和感の原因を探し当てるのに、さして時間は掛からなかった。今日の朝日は彼女の目の前。つまり、テーブルの上に本を積んでいないのだ。一冊も。

いつもであれば読破した本とこれから手をつけようとしている本とで、最低でもテーブル上に本のシンタワーが建設されているはずなのに、今日はそれがない。彼女はただ一冊の、手元の本にのみ『読む』という意識を集中させているようだ。本来ならそれは当たり前前の光景であるが、これまでの彼女を見てきた者としては、その様子には違和感を感じざるを得ない。

あまりジロジロと注目し続けるのも失礼かもしれないが、それでも高雄は何かにつけてついつい彼女へと視線を向けてしまっていた。

いつもと違う状況というのも理由の一つではあるが、それ以上に彼女自身の魅力によるところが大きい。

黄色人種としての色は残しながらも、そこに溶け込みつつ主張し過ぎない白い肌に桃色の小さな唇は、粉雪の中で芽吹く季節はすれの花のよう。決して切り揃えられている訳ではないウェーブ気味な藍色の頭髮は彼女のうなじと両耳を隠し、襟元まで伸びたそれは朝露を眺めるような美しさ。少しでも目尻の鋭さがあるも、つばらな水色がかった瞳は直視すると吸い込まれてしまいそんな錯覚に陥るだけの魅力がある。

気がつけば彼女の姿を眺めてその神秘的な雰囲気惹かれ、ハツと我に返って視線を外すことの繰り返し。彼女が急にこちらへと振り向き、目と目が合ってしまうことだけは避けたいが、いくら手元の本へと視線を戻してもまた無意識に彼女の方へと視線を向けてしまう不思議さ。おかげで手元の本の内容などこれっぽっちも頭に入ってはこない。時間潰しのためだけに適当に選択して読み始めた本だから、さしたる問題があるわけでもなかったが。

あつという間か、ようやくか。  
時刻は午後六時となり、そこからの状況の変化は鮮明に予想出来る。

おそらく数分と経たぬうちに、彼女は今手にしている本を持ってこちらに来るだろう。そして眉をピクリともさせずあの言葉を口にするはずだ。

「お願いします」と。

準備は万端であった。カウンターのパソコンはすでに立ち上げ作業が終わっており、管理ソフトは貸し出しの受付画面へと移行させ



である。あとは彼女から本を受け取り、いつもの処理を行うだけ。そこまでが予定調和であり、実際いつ来られても構わなかった。

だがしかし……今日という日は、彼の立てたその予想すら裏切った。

どういうことが彼女が行動を起こす気配がない。今度の違和感にはさすがの彼もすぐにそれと気付いた……が、すぐに声をかけることはせず、カウンターの内側で座して待つことにした。きつとキリのいいページまで読破したあたりで動き出すのだろう。そう考えたの待機であった。

「……………」

時間にして、およそ五分。男子であれば余裕でトイレを済ませられそうな経過時間。

彼はカウンターの中でじっとして待っていたが、やはり一向に彼女が席を立つ様子が無い。それどころか手元の本から目を離そうとしていない。今も熱心に読みふけている。いや、よく見れば彼女はページをめくっていなかった。同じページを開いたまま、ジッと凝視するように見つめ続けている。よほど興味深い一文でも載っていたのだろうか。

「……時間ですので、閉めますよ」

高雄はさすがに声を出して、彼女に下校時刻となったことを知らせた……はずであった。

発した声は適量、この静寂な室内で、この距離で彼女の耳に届かなかったはずはない。けれど彼女は何の反応も示すことはなかった。ほんの僅か、手元の本から視線を外すことすらもである。

諦めは若干早いかもしいないが、埒が明か<sup>ら</sup>ないと判断した彼は席

を立ち、彼女のもとへと歩み寄った。そして咳払いを一つ。戦闘行為に例えるならば、それは先制のジャブか、威嚇砲撃というところだろう。

「……………」

咳払いの後で待つこと数秒　彼女は振り向くことはなかった。彼の存在に気付かないほど手元の本に没頭しているということだろうか。先ほどの下校時刻に流れる鐘の音も聞こえないほどに。

次の手段として、彼はその華奢な背に向かって声をかけた。だがやはり彼女は振り向こうとしない……どころか、まるで耳栓でもしているかのように無反応だった。「もしかしたら、彼女は難聴なのではないか？」という推測が高雄の頭をよぎるほどに。

最終手段だということで、彼は直接彼女の身体へと触れた。セクハラ扱いされても困るので、人差し指で彼女の肩を叩く程度だが……そこまでしてようやく、彼女は彼の存在に気付いたらしく、振り向いてくれた。

「はい？」

意図せず視線がぶつかり、その顔に思わず魅せられそうになる。ミステリアスではあるが、美少女と言って差し支えないであろう目の前の少女。恋の相手募集中な男子であれば、一般的な基準からして彼女に一目惚れする確率はかなり高いものだと思われる。高雄が見つめているのか、それとも見つめられているのか。それすらも曖昧になってしまいそんな感覚であった。

「なにか？」

オルゴール音が硝子ガラスの共鳴か　耳に優しく、それでいて印象に

は残る彼女の声のおかげか、高雄は彼女に声をかけた理由を思い出す。そして密かな緊張が表に出ないよう装いながら、既に下校時間を知らせるチャイムが鳴ったことを彼女に告げた。

## Mirabilis 2

「気が付きませんでした。もう六時でしたか」

三度目の正直で彼女はようやく彼の存在を認識し、先ほどのチャームに気付かなかったことを訴える。壁に掛けられた時計で現在時刻を確認し、彼女は席を立つなり頭を下げた。無論その発言中も含め、彼女の表情が変化することはない。

「すみませんでした」

「あ、いや……べつに謝ってくれなくても」

高雄としては下校時間を越えたからといって叱る気など毛頭ない。生徒会の連中はうるさく言うだろうが、多少の時間オーバーくらい大目に見たっていいじゃないかというのが彼の心情である。

「あなたが気付かせてくれなかったら、私は明日の朝まで気付けなかったかもしれない」

声をかけたのは正解だったようだ。いくら図書委員とはいえ、さすがにそこまで我慢比べ出来る自信は無い。

「ま、まあそれはいいよ。風紀委員の見回りもまだ来ないだろうしさ……それよりその本、借りてく？」

「借りていけ」というつもりで言ったのではない。彼女なら途中まで読んでいたその本を当然借りていくだろうという予測、ある意

味経験則からの発言である。

「ご丁寧に本を受け取るため自身の右手まで差し出しての発言。しかし彼女はやはり表情を少しも変えず、ただ一言。

「困りました」

高雄は軽く面食らい、即座に間抜けた声で聞き返しそうになった。この状況下、何に困ったというのか。そもそも彼女の表情は、その発言内容と比例せず平時のそれと等しい。とても何かに困り果てているという人間の表情には見えない。どちらかといえば困惑の顔色を表しているのは高雄の方であろう。

そんな彼に、彼女はまたしても意図不明な質問を投げかけてきた。相変わらず抑揚のない、必要最小限の音量で。

「つかぬ事を伺いますが、あなたは図書委員ということで間違いないでしょうか」

「はあ……まあ、一応そうですね」

彼女の問いは、さらに高雄を困惑させるものであった。後輩相手に敬語で返答し、さらに「今まで自分が貸し出しの手続きをしていたじゃないか」というツツコミも入れ忘れるほどに。

彼女とはこれまで会話らしい会話などしたことが無かったが、こんな雰囲気を持っていたのかと思い知った。それはまるで、機械音声に語りかけられているような　冷たい壁に話しかけられているという感覚。実は感情を持たないアンドロイドだとも告白されれば、思わず納得してしまいそうである。

彼の戸惑いなど知ってか知らずか、彼女は間髪入れず次なる言葉を紡いでいく。

「では図書委員であるあなたにお願いしたいことがあります」

そう言う彼女が手にしていたその本を、目の前の彼へと差し出した。片手で投げやりではなく、両手を伸ばして渡そうとしている姿には小動物にも似た愛らしさを覚える。無表情なままなのが不思議……ともすれば少々不気味ではあったが。

「えっと……借りるの？」

「いえ。借りてほしいのです」

彼の困惑は、もはや混乱となった。

確かに彼は少し、いや一瞬だけその本の内容が気になっていた。だがそれは瞬間だけ。どうしてそこまで同じページを見続けていられるのかという興味からだ。現在の途中読者である彼女を差し置いて、自分が先に借りたいとまで思った覚えは無い。それとも無意識にそんなニュアンスの表情をしたとでもいうのだろうか。

「もう一つお願いがあります」

先ほどの発言について問うのは後でもいいとして、まずは彼女のさらなるお願いとやらを聞いてみることにした。しかしその応対の末が、さらなる混乱を呼ぶこととなる。

「この本の中は見ないでほしいのです」

彼の混乱はいよいよ高まった。「貸しておくが中身は見るな」というのは、読書好きな人間にとってはもはや拷問と言っている仕打ちである。彼もこれにはさすがに質問をもって返すことにした。

「えーっとさ……まず、なんで僕がこの本を借りるの？」

「私が借りられないからです」

「……君が読みたいんじゃないの？」

「はい。ですが、私は借りられません」

ますます意味がわからない答えであった。どこぞの顧客リストのように、彼女の名が図書室の貸し出しブラックリストに載っているとも言っのだろうか。そんな物の存在は耳にしたこともないが。

「あなたに理解されるまで説明したいのですが、残念ながら今の私には時間がありません」

彼としてもさらに深い質問を返したかったが、この話はお終いと言わんばかりに彼の胸元へその本が押しつけられた。おそらく黙って受け取れということなのだろう。

「はあ……とりあえず僕はこの本を借りていつて、読まなければいいと」

「その通りです。お願いします」

丁寧に頭は下げるが、無表情なのは変わらない。そんな彼女の雰囲気は圧され、そう思われたというのが正しいかもしれないが……彼はとりあえずその本を借りておくことにした。そこにどんな事情があるのかは推して計れないが。

「助かります。明日の放課後もあなたはここにいますか？」

「……まあ、図書委員だし。放課後には毎日いるよ」

「では詳しい説明は明日の放課後にさせていただきます。今日はこれで」

小さく会釈をしつつ「失礼します」の挨拶を最後に、彼女は早歩きで図書室をあとにした。そうして瞬時に、図書室は静寂な空間へと戻る。

室内には、よく分からない理由で本を押し付けられた男子学生が一人いるだけ。取り残されたような気分だ。デート中に破局したカップルの片割れはこんな心境なのだろうか、未経験ながら彼は想像した。

「……帰るか」

その場にたたずんでも虚しいだけだと悟り、彼もまた帰り支度を始める。いつまでもこの場に留まり、見回りの風紀委員に捕まるのは避けたい。

だがその前にこの本の貸し出し処理だけしていかねければならない。

受け取った本はB5程度の大きさだが一般的な小説ほどの厚みはなく、どちらかというと絵本や児童書の類といった方がしっくりとくる物だった。

「……あれ？」

違和感に気付いたのは、パソコンにバーコードを読み込ませようとした時だ。この図書室にある全ての本、その裏表紙に貼り付けられている読み取り用のバーコードがその本にはなかった。この本が図



書室の物であるとしたら、それはおかしい話である。

去年の年末、図書室内にあった本は全てバーコードのチェックを行ったし、その後に入ってきた本だとしたら尚更だ。どちらもバーコードのチェックに新規の作成、それらの貼り付けを行ったのは他ならぬ高雄自身なのだから。

それに図書室の貸し出し本であるという目印は背表紙のバーコードだけではない。図書室の本の背表紙には小さなシールが貼られているはず。このシールに記載された平仮名と数字を元に陳列する棚を分け、またそこに戻しているのだがこの本にはそのシールもない。そもそも毎日のように図書室内の様子を見てきているのだ。シールの貼られていない本が棚に鎮座していたならば気付いていたはず。

（貼り忘れにチェックもし忘れ……それに加えて今まで気付けなかったとか……いや、さすがにそれは）

無論、彼自身のミスである可能性も捨てきれないが、さすがに今日までそれに気付けなかったというのはないだろうと自分に言い聞かせた。

おまけにこの本には著者……作者の名前が記載されていなかった。表紙にも、背表紙にも、もちろん裏表紙にもだ。普通ならその本の一番目立つ部分に、主張しすぎない程度に記載するものだというのに。

おかげでこの本の外見から知ることが出来るのは、この本の題名だけである。あまつさえその題名すらよく意味がわからないという、まさしく謎の本だ。

（……まあ、明日聞けばいいか）

思わず表紙を開き、中の様子も<sup>あらた</sup>検めてみたい衝動に駆られたが、

そこはグツと堪える。彼女からの要望の一つ、「この本の中は見ないでほしい」というのが、今の彼にとって一種の抑止剤のように働いた。一方的な約束とはいえ破るのには多少なりとも罪悪感が付き纏うし、もし中を見たことが彼女に発覚したとして、あの無表情プラス無感情な透明声で問い詰められたら変な汗が噴出し、幾分か寿命が縮まってしまいそうだ。

（……可愛い顔だとは思っただけだな）

彼女の顔立ちを思い出し、勿体無いものだと思ふ。状況が違えば見つめられるだけでありがたくなりそうな程の顔だというのに。

「……いけねっ。急がないと」

とにかくバーコードがない以上、この図書室の本であるかどうかは怪しい……しかし残念ながら、今日のところはそれを詳しく調べるだけの暇がない。もうしばらくすれば、見回りの風紀委員達がやって来て小言のマシニングを浴びせられてしまうだろう。そうなる前に校舎から退散しておかなければならない。捕まったら最後、面倒な事この上ないのだ。

イレギュラーな事態ということで貸し出し処理はスルーして帰ることにした。今日も彼女に対してのみ 他に仕事をする機会に恵まれなかったパソコンの電源を落とし、照明を消し扉を施錠して図書室を後にした。

帰り道の途中、彼は手にしていた本の表紙をもう一度見て、やはり無意識に首を傾げてしまう。

「？」の童話   それが、表紙に記された唯一の文字。始まりのきっかけになった、この本の題名だった。



### Mirabilis 3

高雄が、朝日から謎の本を預かった翌日の放課後。

帰りのホームルームもつつがなく終了し、彼は教室を出た足でまっすぐ職員室へと向かう。

「失礼しまーす」

形式的なノックを三回。扉を開け軽く一礼してから入室する。放課後すぐという時間帯もあつてか、室内にいる教員は数名であつた。べつに個人指導を受けたり進路相談をしたりするわけではない。理科室や音楽室といった特別教室の鍵は、ここ職員室に保管されているのだ。これから向かうとして、いる図書室の鍵もここにあり、いつも通りそれを借りに来たわけである。

「図書委員ですが図書室の鍵を借りに来ました」

いくら自分が善良な一般男子生徒だからといって、用件を済ます以上にこの場所で長居はしたくない。テンプレート通りの挨拶をし、扉のすぐ横に掛かっている鍵を入りには劣る速度で拝借。退室の挨拶をして扉へと手を伸ばしたときだった。

「あ、おーいタカちゃん。ちょっとちよつとお」

残念ながら彼は捕まってしまった。それも現状では一番捕まりたくない相手に。

室内にいくつも並ぶ、教員たちの机。そのおよそ中央の奥側にその人物の机はある。

高雄はため息を吐きつつ呼び声のした方へ目を向けた。文字通り山積みになっている雑誌やら教科書やらプリント類の向こう側から伸びた右手。高雄の姿が見えているとは思えないが、手首をゆるく稼働させて「おいでおいで」のジェスチャーをしていた。

仕方なく声の主のもとへ移動すれば、やはりというべきか。ノートパソコンのキーボード部分を枕代わりに、部活動で疲れた生徒でもここまではならないだろうグダグダな体勢の美女が一人。

「……何の用ですか、先生」

「んもー。タカちんてば硬いぞお？ いきなり用件聞くんじゃないで、まずは世間話から入るとかしないと女ウケ悪くなるぞー？」

「今のところ、そんな予定はないですから……っというか相変わらず酒臭いですよちょっと」

居酒屋から出てきたところだと言われても疑われないであろう、アルコールの混ざった吐息を撒き散らしているこの人物。なんとれっきとしたこの学園の教員である。それだけ説明されても嘘だと言う者がほとんどであろうが、残念ながら真実だ。

「ちょっとおー？ うら若き乙女に、いきなり臭いとかヒドくないっすかウィーッ普」

「若いつてのは否定しませんが、酒臭いのは事実っというかお願いですからここで吐かないでくださいよ？」

「はっはっは。酒は飲んでも飲まれるニヤーってか？ はっはっは」

「……まさか授業中にも飲んだんですか？」

「いんやあー？ さすがに授業中は我慢したんだニャンニャンニャンゴロー。にゃーっはっはっは」

もはや会話にならぬ対話に高雄は閉口し、軽い頭痛を覚えて自身の眉間を押さえた。「こちらの女性は教員です」と紹介したらどこぞの団体のお偉いさんが発狂しそうなこの酒浸り教師。

彼女の名は、かがおとほ加賀音羽という。

三十路より少し手前……と本人は豪語している美人教師。美人と連呼しているがどの程度美人なのか。本人同伴で街角アンケートを行えば、十中八九美人だと誰しもが認定するだろう。

赤薔薇のような艶のあるロングヘアー。顔立ちも、スタイルだって抜群だ。ハイヒールいらすの高身長に見せびらかすように豊満なバストとヒップ。街でモデルにスカウトされたこともあるらしいがスカウトマンがいやらしい視線で見てきたからブツ飛ばしてやったとは本人談である。

彼女の最大と言ってもいい魅力に、非常に女らしい外見でありながら女らしくしていない中身だろう。竹を割ったような、悪く言えばオッサンっぽい性格。ひよつとすると並の男より男らしいかもしれない。けれどそのミスマッチさも合わせて彼女という人間全体の魅力となり、外見内面問わずその虜となる男子生徒や男性職員は後を絶たない。「レディーカガ」なんて呼ばれ方をしていたのも高雄は何度か聞いたことがある。秘密のファンクラブまで設立しているという噂だ。彼にとっては興味のないことであるが。

「いやはや聞いてよ？ 昨夜近くの店でちょーっと飲んだらさ、朝

起きたら気分わりいーのなんの……そんなでもさっきまでは頑張ったんだけどさ、どーにも気分すぐれねえってもんでコイツをイッキしたわけさあ大佐」

この人が自分で「ちよつと」ということは、小さな居酒屋なら店内がカラッポになる位は飲んだんだろうなと想像しつつ、傍らに転がっていた酒の空き瓶を拾ってみる。ラベルには禍々しいドクロのイラストが描かれていた。

「アルコール度数八十六パーセント……火つきますよこれ」

「んー？ やっぱ九十パーは越えてないとねえ。楽しめないよねえ？」

もはや迎え酒というレベルを超えている、苦行と呼ぶすら生温いその所業。体内に何ガロン溶け込んでいるのだろうかと高雄は不思議に思うばかりである。

「どーせアンタこれから図書室だろお？ ついでに一本買ってきておくんなまし。適当なラムでいいからさ」

「買いませんし買えませんよ」

「りょーしゅーしょーの金額欄は白紙でよろしくー。えへへー」

「聞いてないし……」

今こうして酒に溺れている姿はいつもの事なのでとりあえず置いておくとして、これでも彼女は一応史書教員。要するにこの学園の高等部における図書室のボスなのだ。一応というのは他の教科と掛

け持ちだからである。

真っ白なロングコートもどき……もとい、白衣という姿を見れば一目瞭然なのだが、彼女は化学の教員でもある。本人は日々怪しい実験を化学準備室にて行っており、よく爆発音が聞こえてくるとか「ボマーカガ」なんてあだ名もいつだったか聞いたことがあった。とにかく、美人ではあるがオヤジ趣味で日々酒浸り。迎え酒の迎え酒を繰り返して、水の代わりにアルコールを摂取している危ない化学教師というのが、彼女である。

「……用件はそれだけですか？　だったらもう行きますよ」

「なんだあーよ、つれないねえ。せっかくだまには図書室に顔出してやろうかと思ってたのにさー」

「せめてアルコールが抜けてから来て下さい。図書室に酔っ払いはカンベンですよ」

「へいよあー。んじゃ、あたしゃあもう少し寝ますかねーと……」

これでよくクビにならないものだと思心するが、本人曰く「働きやすい職場は自分で作るべし。そのためには上司や同僚の弱み握るのが手っ取り早い」とのこと、まあ色々握っているということだろう。詳しくは知らないほうがいい気がする。ならない。

それでも平常運転である酔っ払った彼女の相手を切りあげ、高雄は今度こそ職員室を後にしようとする。情けなく開かれた彼女の口から、これまた情けなく垂れ広がった涎がパソコンを濡れさせているのが少々気掛かりだが、長く関わっても損しかなさそうなので放っておくことにした。

「あー。タカちゃん？　ついでにスモークチーズもお」



「……買ってきませんってば」

もはや引くが得策。一名のせいで酒臭い空間と化してしまっている職員室を後にし、高雄は当初の目的であった図書室へと寄り道せずに向かう。

それから数分の後。場所は図書室前の廊下。

見れば、施錠されたままの図書室の前には既に常連さんが一名。高等部棟では滅多に目にしない中等部の女子制服に身を包み、置物のようにちょこんと立って待機していた。近付いてくる高雄の足音に気付いたのか、振り向いてこちらを見つめる……相変わらず綺麗だが無表情な視線。

「ごめんごめん。遅くなって……」

「いえ」

図書室の開錠が遅くなって申し訳ないという姿勢をとりあえず朝日へと見せ、彼は謝罪しながら鍵を回して扉を開ける。返ってきたのは何の感情もこもっていないとしか思えない、彼女らしい端的な返事だった。

「ちょっと先生につかまっちゃって……あの、もしもし？」

「はい」

扉を開けて室内へ。喋りながら三步ほど進んだところで彼は振り向いて尋ねた。いや、尋ねてしまった。

「……入らないの？」

「入ります」

ならば何故、彼女は扉が開く前に立っていた位置から一步も動かないのだろうか。金縛りに遭っていると言われても納得出来てしまいういそうな直立不動ぶりであった。しかしどうしたのかと訊ねる前に、彼女からそれを答えた。

「考え事をしていました」

「はあ……」

「あなたの顔を見たら、ふと疑問が浮かびまして」

「……どんな？」

「ハムスターはなぜあんなに回し車に夢中になれるのでしょうか」

「……知らないです。そんなの」

「ですよ」

だったら聞かないでよと彼は言いかけた……表情には表れてしまっていたかもしれない。そもそも人の顔を見てそのような疑問が浮かぶというのはどういうことなのだろうか。ハムスターが回し車を連想させるような顔ということか……はたしてそれは人間の顔だろうか。実際に「あなたの顔はそうなのです」と言われたら、それはさすがに傷つくが。

「冗談です」

高雄は心底安堵した。本気でないことは祈っていたが、その言葉で少しだけ報われたような気がした。顔面的に。

「その疑問が浮かんだのは、あなたが来る前です」

（ハムスターと回し車については、考えてたのか……）

やはりこの少女、どこまでも謎であると彼はあらためて思った。しかし意外でもあった。彼女の口から冗談が飛び出すとは、今の今まで考えもしていなかったから。

「家の者から、たまには冗談の一つでも言っではどうかと言われたので、試してみました」

「あ……ああ、そう……」

「では失礼します」

ちょこんと可愛らしい会釈をしつつ、彼女も図書室内へ。そしていつもの……もはや彼女の指定席となった、テーブル最奥の席へと腰を下ろす。もちろんその表情には微塵も変化というものが見られなかったが、それもいつものことである。

## Mirabilis 4

おそらく今日も最初にして唯一の来訪者である彼女の様子を横目に、高雄はカウンターの奥へカバンを置きノートパソコンの電源を入れる。

「……あつ」

そこで彼は思い出した 忘れてはいけない用事。とりあえず慌てても仕方ないので落ち着いてカバンを開き、中から一冊の本を取り出した。

「……はいこれ。返すよ」

彼女の前、テーブルの上にその本を置いた。昨日の放課後にこの場所で彼女から預かり、借りて帰った本だ。

彼女は「どうも」とたった三文字の感謝の言葉を口にし、『「？」の童話』という名の、その本をそつと手に取った。

「一応聞いておきますが」

凜としてやや鋭く、それでいて熱のない視線が向けられる。

彼が一瞬目を逸らしたくなったのはおそらく気のせいではないだろう。

「この本、中を見ましたか」

「……いや。見てない」

「そうですか」

「……え？ ……それだけ？」

取調べのような雰囲気には高雄はたじろいだが、彼女はその受け答えだけで視線を手元の本へと戻した。彼からすれば若干の拍子抜けである。もっとしつこく追求されるか、疑われはするであろうと心の中で身構えていたから。

「私には確かめようがありませんが、平然と嘘をつくならあなたはその程度の人だというだけです」

「あ、そう……」

「それに、読んだところでおそらくは意味がわからないと思います」

彼にとっては今の彼女の発言……いや、彼女という人そのものの方が、よっぽど意味がわからなかった。しかし深く追及する気は起きず、彼はカウンターに戻っていつも通りただ本を読むだけの名ばかりの図書当番に戻ろうとした。

だが目の前の少女は鞆の中に手をつ込んだかと思うと、なにやらかわいげな小袋を取り出して「どうぞ」と彼へ差し出す。

「……なに？ 爆弾とか？」

「自爆する気も、その予定もありません」

彼女の手からその袋を受け取ってみる。中身は市販のクッキーであった。バニラビーンズの甘く優しい香りが鼻腔をくすぐってくれ

る。

「お口に合うかわかりませんが、本を借りてくださったお礼です」

「はぁ……どうも」

好意を無にするのも何である　だがどちらかといえば、彼女の雰囲気飲み込まれたままであったことが大きいだろう。高雄は素直にそのお礼を受け取ることにした。渡し終えた彼女はといえば実に彼女らしく、ほとんど音を立てずテーブルへと戻っていく。

そうして彼女は再びあの本を読み始め、開いたページに夢中な様子である……貰い受けたクッキーの包み紙を片手に、さてどうしたものかと彼は思慮した。

(……そうだ)

思い立ち、彼はおもむろにカウンターの奥の部屋、司書室へと移動した。この部屋にはテーブルに水道設備まで揃っている。

まずカップを二つ、皿を一枚テーブルの上へ用意する。棚に常備してあるインスタントコーヒーとコーヒーマルクの粉をカップの中に、受け取ったクッキーを皿の上へと広げ……はたして彼の予想通り、一人で食べるにはちょっと多い量であった。

準備を終えた彼は図書室へと戻って彼女に声をかける……が、無視された。いや、意図的な無視ではない。彼女は昨日と同じく、あの本に夢中になっていただけだ。現に肩をつづけばきちんと振り返ってくれたのだから。

「なんででしょう」

やはり彼女は無表情。しかしそんなこと程度ではめげず、彼は誘

いの言葉をかける。司書室に用意した、小さなお茶会へと。

「さっき貰ったクッキーだけどさ。一人だと多いし、一緒にどうかな？　って思ってた……」

予想通りであつたが、彼女は即答することなく思慮に耽る。そこまで必死にというわけではないが、彼はもう少し粘って誘ってみることにした。一人では多すぎるクッキーの消費についてもそうではあるが、それ以上に彼女自身へ質問したいことがあるというのが大きい。

「コーヒーもいれるしよ。それに……その本のこと、まだ説明されてなかったし」

「そうでしたね」

テーブルの上に開かれたままとなつてゐるその本を高雄は指差し、そこでようやく彼女から答えが得られ、ついでに質問も返された。

「ですが、いいのでしょうか？」

「……それはどういう意味で？」

「二つです。あなたに差し上げたお礼に私も手をつけていいのかという事と、図書室での飲み食いをしていいのかという」

後者の疑問については、生徒会長みずからが図書室内での飲み食いを実行しているのだからいまさらな気がした。しかし彼女のよう  
に善良な一般生徒からすれば、やはりそれは問題行動と認識される  
のだろう。

高雄はまず時計を指差し、次に背後を指差し、それに答える。

「ここは今日も閑古鳥で来る人なんて風紀委員の見回りくらい。それにはまだまだ時間があるし……図書室での飲食は禁止だけど、司書室なら問題なし。もう一つの疑問については、ノープロブレムというよりもウエルカム」

「そうですか。ではお言葉に甘えることにします」

彼女も無事承諾し、二人はカウンター奥に覗く司書室へと移動することにした。この部屋には常にコーヒーや紅茶といったお茶類と多少の菓子が常備してある。委員会特権というやつだ。

しかし室内に入るなり、彼女は当然にして適切な疑問を口にした。

「ここは酒場ですか」

司書室内には至る所に空となった酒瓶が転がり、彼女の言葉通りと言っていい状態であった。

もちろん犯人は高雄ではなく、この部屋の主である加賀教諭によるものであるが。

「未成年者の飲酒は法律で禁止されていますが」

「残念ながら僕は未経験の下戸だよ。この部屋のボスがね……そのうち解る日が来ると思うけど」

「そうですか」

背を向け、お湯の入ったポットを持ってくるまでに彼女は椅子に座っていた。椅子を引く音すらしなかったのは礼儀正しさの表れか、



はたまたそういう特殊能力か。おそらくは前者であろうが。

高雄はコーヒー入りのカップと、角砂糖の入った瓶を彼女の前に置いた。

「どうぞ。ご自由に」

「ありがとうございます」

彼女は礼儀正しく一礼。透明な硝子瓶の蓋を開き、真っ白な角砂糖をつまんでコーヒーの中へ入れる入れる入れる入れる。

「ちよちよっ、ちよっと待った……！？」

「なんでしょう」

「それ……飲むの？　っていうか、飲めるの？」

「はい。私、甘党なので」

それにしたって彼女が肉体を有する人間であるならば、いくらなんでも限度というものがあるだろうと彼は思った。コーヒーの水面から角砂糖のタワーが顔を出している様子など、産まれてこの方見たことがない。眺めているだけで血糖値が上がってしまいそうな光景である。

「ではいただきます」

「はあ……どうぞ。クッキーも」

「いただきます」

砂糖満点なコーヒーを飲みつつ、クッキーにも手を伸ばす朝日。健康的な面と味覚的な面で心配になる対面の彼をよそに、まったくもって普通に食べ進めている。その味に満足しているのかどうかは、無表情のままなので彼からは推し量ることが出来ず。

「おいしいです」

だが感想からして、味覚という器官は機能しているようである。高雄は思わず安堵する心境を覚え、自身も皿の上のクッキーを口に放り込んだ。

風味、甘味、食感とも絶妙な一品。近所のスーパーに並んでいるような安物ではおそくないのだろう。

「……ところで、その本についてなんだけどさ」

そしてコーヒーを飲みつつ、本題について切り出してみた。もちろん彼が手にしているコーヒーはブラックだ。目の前の少女の真似などしたら確実に寿命が縮まる。体内のインスリンがいくらあっても足りない。

「ええ。詳しく話すんですけどね」

「……覚えておいてもらえて助かるよ。昨日の、あの後に聞きたいことも増えたし」

「そうですか。ではどこから話せばよろしいのでしょうか」

「とりあえず最初から……その本との出会いとか？」

質問したいことはいくつかあったが、まずはそこから教えてもらうことにした。彼女が全ての質問に答えてくれるという前提でだが。

「むかしむかしあるところに」

「……そこからです」

「お爺さんとお爺さんとお爺さんが」

「なにその組み合わせ……ちょっと先が気になるんですけど」

「というのは冗談です」

「その試し、まだ続いてたのか……っていうか冗談は抜きでお願いします」

「わかりました。真面目に話すことにします」

高雄へと向けられる彼女の表情は変わらず。

けれどほんの少しだけ残念そうな顔をしていたようにも見えた気がした。

「この本はこの図書室で見つけました」

「……でも、バーコードないよね？ その本」

「はい。それは私もすぐに気付きました。読み出す前に確認したのですが、本の中にもバーコードはありませんでした。それから作者名も」

この図書室の本ならば、図書委員の手によって　と言っても、実際に仕事をしているのはほとんど高雄だけだが、貸し出しの際に読み取るバーコードが貼られているはずである。しかしこの本にはそれがない。背表紙のシールもまた然り。

「ほんとにタイトル通りの謎な本だな……でもそんな本、どこの棚に？　今まで全然気付かなかったけど」

「いえ。テーブルの下に落ちていたんです。拾ったのは昨日でした。誰かの落し物か忘れ物だと思ったので拾っておいたのですが、好奇心に負けて読み始めてしまいました」

たしかにこのような謎に包まれた書物など、読書を趣味としている人間が拾ったのならその中身を確認せずにはいられない。高雄自身、昨夜は幾度も「読んでみたい」という衝動に駆られていた。朝日との拘束に近い約束があったために事なきを得たが。

「これが図書室の本じゃないってのはまあいいとして……なんで俺に預けたっていうか、借りさせたの？」

「それについては落し物として申告するべきだったのではないかと反省しています」

べつに責めてなどいないというのに、朝日は高雄に向けて深く頭を下げた。まるで生徒指導室での、教員と生徒のやりとりのようである。

「いや……僕に謝ってくれなくても。自分で借りていけば良かったんじゃないのかなあって」

「私の性格からして、そうするべきではないと判断したので」

「……どゆこと？」

「その説明については、まず私自身について話すことになるのですが」

これから話し始めるんだぞという合図なのか意気込みなのか、彼女はわずかに残ったコーヒーを飲み干した。カップの底に残った角砂糖の溶け残りが、彼女の飲んだコーヒーの糖度の高さを表している。まるで砂金採取のようだと高雄は嫌な意味で生唾を飲んだ。

「突然ですが、私の趣味は読書です」

それはそうだろう。

ここまで毎日図書室に通い詰めておいて、読書が趣味ではなかったら逆に驚くというものである。それは一体どんな精神修行だろうか。

だが高雄が「そんなことは知っている」と口を挟む暇もなく、彼女は無表情のまま続けた。

「私は中等部三年生なのですが、中等部卒業までの目標が『図書室の本を読破すること』でした」

「それはまた凄い目標を……でも、だったらなんで中等部じゃなくてこっちの図書室に？」

「仰るとおり、中等部棟にもこのことと同じく図書室があります。ですが先日、そちらの蔵書は全て読み終えてしまいましたので」

「え……は、はあっ!？」

「はいそうですか」と聞き流すことは出来ず、高雄は少々オーバー気味なりアクションでもって彼女の発言を聞き返した。中等部の図書室の方がここより少しばかり小さいとはいえ、そう易々と「読み終わりました」なんて言えるような冊数でないことは、彼自身も知っていたからである。

「全部って……あの図書室にあった本、全部っ!？」

「そうですが」

日本語としてはおかしいかもしれないが「自然な無表情」とでも言おうか。彼女は平然たる態度を微塵も失わせること無く答えた。それは決して偉そうに見せる意味合いではなく、おそらくは相手は何に驚いているのかが理解出来ていないためであろう。それはそれでおかしいような気もしたが。

「だって……いや、数えたことはないけど、何万冊とあるでしょあれ……」

「私は漫画や雑誌は読みませんのでそれは除外しますが、全部で五万と百四十冊でした」

「それを……なに？ 三年と経たずに読み終えたの？」

「はい」

彼女は何の躊躇も無く答え、高雄をこれ以上なく静かに驚愕させた。まさに「言葉を失う」という状態だろう。同時に、夕陽を浴びつつ目の前のテーブル上に大量の本を積んでいた彼女の姿を思い出した。

たしかにこれまで高雄が観察してきた彼女の読書ペースであれば、計算の上ではそれも可能かもしれない……だがそれを実際にやり遂げてしまうというのは、もはや偉業に等しいものがある。おそらく進学や就職試験の際には最高の自己アピールポイントとなること明白であろう。

「なのでまだ時期尚早ではあるかもしれませんが、こちら的高等部

棟図書室の本を読み始めたわけです」

「は、はぁ……そうですか」

「一冊程度なら家に帰っても読む時間があるので、それで毎日借りていました。しかし、です」

「……しかし？」

「この本が立ち塞がりました」

高雄は再び閉口し、みずからの判断能力と読解能力が足りないのではないかとほんの少しだけ自問自答して検討した。だがおそらく、彼女の言葉には誰もが首を傾げるであろうという判断に至り、少しだけ安堵するのであった。

「私は一度読み始めると、その本の続きがどうしても気になってしまいます」

「……多くの人がそうじゃないかと」

「今まではよかったといいますが、たとえば読み途中の本があったとしても、優先順位の高い習い事などには集中出来ていました」

「……はぁ。この本は違っていたとでも？」

「はい。違っていました」

朝日は膝の上に置いていたその本を、テーブルの上に。そして眺める程度に最初の見開きページを開いた。どんな心中なのか他者が



らは決して読み取れないであろう無表情のままで。

「この本は意味がわかりません」

開閉していることがろうじて分かる程度にその小さな口を動かしてつぶやき、彼女はかれこれ数時間は眺め続けたであろう始めの見開きページを指でなぞるように撫でた。

「……読めなかったってこと？」

「いえ、読むこと自体は至極簡単です。全て日本語ですし。わからないというのはこの本が存在する意味、です」

「存ざ……意味？」

「はい」

「ええっと……いちいちそんなこと考えて読まないといけないの？」

「いけないことはありませんが、重要だとは思います」

決して強くなく、それでいて弱くもなくそう言い切ると彼女は「失礼します。待っていてください」と言い残して席を立ち、図書室へと静かに向かう。

そして一分と経たずにまた司書室へと戻って来た……その手に、大小二冊の本を持って。

「たとえばですが」

そして再び席に着くなり、その二冊の本をテーブルの上へと置い

て ついでに皿の上のクッキーをひとつまみ口へと運ぶ。それを上品に咀嚼し、飲み込んでから彼女は再び口を開いた。もちろん、変わらない無表情のままです。

「こちらが辞書、こちらが小説です。それぞれに存在する意味があると思いますが、わかりますか？」

「……調べるのに使うのと、読んで楽しむ……ため？」

「おそらくですが、それで正解だと思います。ですが、この本からはそういった意味が見つかりません」

「……そうなの？」

「そうなのです」

そのような意味など 読もうとする本の存在意義など、高雄はこれまで考えたことはなく、また考えようとしなかった。それは彼の思考や、読書に取り組む姿勢がおかしいからではないだろう。なぜかと問うまでもない。だってそれは、おそらく決まりきっていることだから。

辞書は何かを調べ、詳しく知るために。

小説は、そこに書かれた物語を楽しむために。

そうやって読まれるために、それらの本は生み出されたはずなのだから。

だが彼女の前に立ち塞がったというその本には、彼女の言う「存在する意味」が感じられないとのことである。それは、なぜか。

「この本なのですが、題字から読み取るにこれは童話です。童話のはず、です」

「うん……表紙にそう書いてあるし」

「では尋ねますが、童話とはなんでしょう？」

また難しい問答をしてきたものだ。高雄は頭を抱える思いであった。それとも彼女にとっては簡単な問い掛けなのだろうのか。

とにかく、聞かれたからには何かしらの回答を示すべきだろう。彼は急激に脳のエンジンをトップギアへと変え、答えを追求し始める。こんなことなら脳に栄養を与えるために、自分もコーヒーに少しは砂糖を入れておくべきだったかとも思った。さすがに彼女ほどの量は遠慮したいが。

「こ……子どもが読む、もの……」

「それだけですか？」

即興で思いついた答えだ。正しいかどうか判断するだけの時間も無かった。ましてや、彼がどんな発言をしようとも彼女の表情が未だに無表情を貫き通している現状では、返答が正しいのか間違っているのか推し量ることもままならず。

「大人も読むか……あ、でも子どもが主な読者で……」

「童話という物は、主に幼児期の子どもが文字と言葉を学び、善悪の判断等の情操教育であったり美的感覚や想像力や価値観を育て、また親子のコミュニケーション手段としても使われるというのが、

一般的なイメージだと思われます。最近では、大人に向けたジャンルとしての童話も出てきてはいますが」

「……………」

単なる思い過ごしであつて欲しいとは願うが、年下の後輩にここまで流暢に説明されてしまうというのは……なんだか自分が何の教養も無い馬鹿のようにしか高雄には感じられなかった。せめてもの救いは、彼女の表情が彼を卑下するものでも蔑むものでもなかったということだろう。変わらぬその表情の裏にどんな想いを抱いているかはさておくとして。

「ですが、やはりこの本は意味がわかりません。そうした目的で作成されたとも思えないのです」

「……まあ、その本の中身が意味わからんってのはなんとなくわかった……でも、なんで僕にこの本を？」

「この本を借りてしまったら、私の生活ペースが狂ってしまうと判断したからです」

そう言われて高雄は、先ほどの彼女の発言を思い返した。「優先順位の高い習い事など」と言っていたが、忙しい私生活を送っているのだろうか。良家のお嬢様だったりする可能性もあるかと考え……そしておそらくではあるが、彼女は時間を厳守するタイプの人なのだろう。ということは、それを崩してしまうほどにその本の内容は面白いということか。

「面白いというより、興味深いと言ったほうが。古文書の解読に挑む学者とでも例えましょうか。現代の日本語として読めるぶん、こ

こちらの方が簡単ですが」

「あー……なんとなくわかった。読めはするけど意味がわからないから、どういふことか気になるってことか」

「その通りです。昨日の放課後はこの本を読むことだけに費やしていましたが、それでもさっぱりでした。ですが、そのぶんだけ夢中になってしまいます。下校時刻や、あなたの呼びかけにも気付かないほかに」

たしかに下校時刻にも気付かずに読書を続ける彼女の姿は昨日初めて見た。とはいっても、彼女がここに通うようになってから数日間の様子を見てきただけではあるが。

「借りて帰れば確実に生活を犠牲にしています。しかし図書室に置いておけば誰かが借りていってしまうかもしれません。そこで毎日カウンターに座っていたあなたに預かってもらうという形をお願いしたわけです」

「そういうことだったのね……」

「何か、他の理由を想像していましたか？」

「いや、べつに……」

高雄は気恥ずかしそうに顔を背けた 謎の文学系少女から受け取った本が不思議な魔力を帯びていて、秘められた力が目覚めたりだとか。実はこの本は重要な財宝で、それを狙う悪の組織に狙われるハメになるだとか。そんなファンタジックな妄想を実は少しだけしていたなど、口が裂けても言えたものではない。

「私からの説明は以上です。なにか質問があれば、どうぞ」

「んー……いや。とくにこれといったは」

「では私は戻ります。コーヒー、ごちそうさまでした」

彼女は表情以外は丁寧な動作で礼をする。顔を上げた後、その視線は皿の上に一枚だけ残ったクッキーをじっと見つめていた。

「……食べていいよ」

「いえ、そんなわけには。これはあなたへのお礼の品ですし」

「僕も十分食べたからさ」

「それを言ったら、私もですが」

「いいよ。遠慮しないでも」

「いえ。やはりここはあなたが」

譲り合う精神を持つ日本人にありがちな、遠慮と善意の押し合い合戦。

このままでは埒が明かないと、彼女もそう判断したのだろう……ある提案をしてきた。

「ではジャンケンということではいかがでしょう」

「……そうしょうか」

ナイスな判断だと言える。ジャンケンという勝負の上では争うことになるが、残り一枚のクッキーを巡るという現状では極めて平和的な解決手段だろう。もしもこの場に榛名が居たならば、遠慮も断りもなく口に放り込んでいたに違いない。

「では三十九回勝負で」

「食べちゃえよう……めんどくさい」

「それは棄権負けということでしょう」

「はいはい……降参です降参」

「では遠慮なくいただきます」

表情でも言葉でも訴えてはいなかったが、実は食べたかったんじゃないだろうかと高雄には思えた。

彼女は最後のクッキーを、その小さな口へと運ぶ。その時の彼女の表情が少しだけ柔らかく感じたのは、ただの気のせいであろうか。

こうして彼女との小さな……初めてのお茶会はお開きとなったのである。

食べ終えた後の皿とカップの片付けを手伝ってくれた彼女の姿を見て、やはりどこか小動物に似た愛らしさのようなものを高雄は感じるのだった。

二人でのお茶会はぎこちなくも恙無く終了し。

高雄はカウンター席に、朝日はあの本を手テーブルの最端席へ……互いの定位置へと戻ってから少しの時間が過ぎた。

無論、今日までの図書室と彼らの様子を知る人間であれば……その少しの経過時間の間に起こった変化など、語るに足りないものがある。

相変わらず朝日はあの本の最初の見開きページから視線を外すことはなかったし、その表情にも何ら変化は無い。せいぜい高雄が適当に選んで読み始めた小説のページ数が進んだ程度の変化しかなかった。

だが有為転変ういてんぺんという言葉が在るように、こんな閉店営業状態の図書室　この場にも、何の変化も起きないという状況は永遠には続かないものである。

「ういーっす！　遊びに来てやったぞー！」

「……やっぱハルナか」

閑散という言葉がピッタリな室内の空気を急変させたのは、勢いよく開かれた扉と同時に飛び込んできた　元気が最大の長所と言える少女、榛名の嬉々とした声とその仕草によってであった。

高雄はそんな彼女をため息混じりの小さな声でもって出迎え、当の榛名はその対応に不満があつた様子で頬を膨らましている。

「なあーんだよ。あたいを出迎える時は元気にビシッと敬礼って、



「三万年前に約束したろー？」

「天使か悪魔か僕達は……知らないよそんな果てしない前世の約束。ってというか扉を開けるとときにはもう少し静かに……」

「お？　なんだよ、読書娘までいるじゃんか。ちいーっす」

「……そして人の注意も聞いてね。たまにはさ」

高雄も人であるが故、無視されたことに対して嘆きはする。だが榛名の場合は断じて悪意ではなく天然に因るものであるため、傷心は最小限で済むところがありがたい。しかしそうは言っても、少しはこちらの注意も聞き入れて欲しいというのもまた本音ではあった。

けれどその自由奔放さも彼女の個性、魅力と考えればやむなしか。そしてそんな彼の心中など知らず、榛名はこの場の雰囲気、静寂でどこか張り詰めた空気がお気に召さない様子であった。

「……相っ変わらずなーんか暗いねえココはさ……まるでおやつ状態だぜまったく」

「正しくはお通夜な……あとハルナ。いつも言ってるけど、ここでは飲食禁止」

彼女に対する、もう何度目か忘れるほど繰り返したその注意……当然、彼女が「はいそうですか」と従うはずもなく。彼女は手にしていたホットドックをその大きく開かれた口へと放り込んだ。成人男性でも最低三口は掛かりそうなそれを、一口のもとにである。

「ヴェエー？　ヴィービャンガホンガブフウゴボビババグベボー」

「……飲み込んでから喋ってください」

「んぐ……っ！ いいじゃんかそんなに固いこと言わなくてもーって言っただよ」

「ごくんと。周囲の人間に爽快感すら感じさせるほどにいい音が響き……明らかに人間の食道の直径を超えているであろう塊を飲み込んだのが見てとれたが、そこにツツコミを入れたら負けな気がしたので高雄は黙っていた。

「さーてとっ……タカー。遊ぼうぜー」

「……見て分かるだろ。今は読書中だよ。それと図書委員としての仕事中」

「だったら本読んで仕事しながら遊びゃいいだろ。……なにすっかなあー。王将だけの将棋とかどうだ？」

「聖徳太子か僕は……あと、そんな不毛なタイマン将棋はしたくない」

そんな誘いには乗らず、視線を手元の本へと戻す高雄。

軽く邪魔者扱いされた榛名は頬を膨らまし、「面白くない」という気持ちを顔に表して抗議した。

「ちえー。付き合い悪いでやんの……あ、おーい読書娘ー」

「やめときなつて……迷惑だから」

「それはオメエが決めることじゃねーだろ？　つーわけで読書娘。あたいと遊ばね？」

榛名は誘いの言葉をかけたが、期待していた朝日からの返答はなかった。届かない声量ではなかったはずなのだが目線すら向けられることはなく。彼女はただ無言、無表情で本のページにのみ視線を向け続けていた。

「……なあタカ。あたい、なんか悪いことした？　謝ったほうがいいか？」

「いや、そういうのじゃなくて……あれは本に夢中なだけだから」

もちろん、朝日は故意に榛名を無視したわけではない。高雄が経験したように、気付かれていないというだけである。しかしこの現象というか、この無反応さを初めて経験する人間にとっては、幾分かショッキングな仕打ちであろう。

かと思えば榛名はいつの間に、そしてどこから取り出したのか。新たなホットドックの包装紙を破りながらふてくされ始めた。

「ったくよー。皆してあたいを除け者の邪魔者のお邪魔虫にしてさー」

「いや、べつにそういうわけじゃ……」

「ミユキは会議会議会議だし、タカも読書娘も本本本だし。やんなっちゃうぜ……あんぐ」

「いや、会議には出たほうがいいんじゃない……」

「せっかくの青春だぜ？ 若いんだぜ？ 皆もつと遊ばなきゃダメ  
ダーヨ」

「日本に來たて外人みたいなイントネーションいらなから……っ  
ていつか會議から逃げ出して來たってことは、またミユキが怒り狂  
って……」

「ハルナあああっ！」

「うおっ！？ やべっ！」

図書室の扉が開け放たれると共に響き渡る怒号。

はたして彼の予想通り、その怒れる麗人はこの場所へとやって來  
た……しかし榛名はといえば、ミユキが入室したと同時に窓へと駆  
け寄って錠を外し、すでにその両足を窓枠へと乗せ終わっていた。

「……っておいちよつと待て！？ ここは三階だし下はコンクリ……  
……ってホントに飛び降りたよ」

高雄はその身を案じて。深雪は逃がすまいとして。

二人はほぼ同時に榛名が颯爽と飛び去った窓へと駆け寄る。しか  
し榛名は階下のコンクリート地面へ猫のような身軽さで見事に着地  
し、あまつさえこちらに手まで振っていた。彼女の身体能力のな  
せる技である。そしてこちらへと向けられる屈託の無い笑顔が、彼  
女を捕らえんとした深雪の苛立ちに油を注ぐ。

「……っころハルナあ！ 會議が終わったらずくに練習始めるって  
言っておいたでしょ！」

「悪い悪い！ ホットドック切れちまったから、買って來てからな

「！」

「あんださつきも同じこと言って飛び出していったじゃないの！  
あ　待ちなさいよちよつとお！」

怒鳴る深雪と逃げる榛名。

二人の会話から察するに、さきほどまで榛名が食していたアレは『おかわり分』だったということになる……彼女の胃袋、その底無しさも恐るべしである。

「……心配するだけ無駄だったか」

「まったくあの娘は……！」

怒りを向けるべき対象が視界から消え去り、冷静になっていく深雪と、その様子を傍らで見ていた高雄。

数秒ほど時計の針が進み、二人はどちらからともなく窓から離れようとし、偶然にも至近距離で向き合う形となった。

二人の間から広がり、その場を包む気まずい沈黙。

その空気には恥ずかしさや照れといった微笑ましい感情は少しもなく……茨の道を歩き、氷の壁に背をつけるような冷たい緊張感だけが走る。

「……なによ」

「いや……べつに」

侮蔑とまではいかなくとも、それはもはや軽蔑の眼差しであろうか。

深雪が高雄に向ける表情とその視線は硬く、そして冷たい。彼へ

と向けて放たれる言葉の調子もその通りであった。

「ふん　お邪魔したわ」

あくまでも形式として彼女はそれだけ口にし、冷風入り込む窓をピシヤリと閉めて出入り口へと向かっていった。呆ける高雄に振り向くことはなく、未だテーブルに着いて読書を続けている朝日を通りすがりに一瞥し、彼女は図書室を後にした。

「……ふう」

高雄はようやく呼吸が出来る想いで胸を撫で、緊張から解かれた反動が力なく傍の椅子へと腰掛けた。

榛名を含む彼らは幼少時からの幼馴染であるから、互いのことはよく知っている……にも関わらず、今の二人の関係はまるで仇敵のようなものへと変わってしまった。

表立ってぶつかり、争うことはなくとも……近付けば空気が張り詰める、冷戦のような状態である。

もつとも、どちらかといえば冷たい態度をとっているのは圧倒的に深雪の方ではあるが。

「質問してもよろしいでしょうか」

「……どうぞ」

「あのお二人は、どういった方なのですか？」

対面の端にいる朝日から、意外にも話しかけられた。そしてその質問の内容も意外であった。てつきり彼女のことだから目の前の本にのみ集中して、今のやりとりにも気付いていないのではと高雄は

考えていたのだが。

「えっと、中等部だから知らないか……最初に来たあの元気な大食い、この春から正式に高等部の生徒会長になる一つ上の先輩で……あとから連行しに来たのが生徒会の会計さん。こっちは僕と同級生」

「生徒会長でしたか。あのお方は」

朝日は表情こそ変わらぬが、少なからず驚いていたであろう。葛城榛名という人間を詳しく知らない人間からすればそれは当然だと言える。少し接触、表面の浅い部分を見ただけで彼女が生徒会長だと言われても、およそ信じられるものではないだろう。

「失礼かも知れませんが、後から来た眼鏡の方のほうが会長だと言われたほうがしっくりくるような気がします」

「……まあ、それについては同意だけどね。でも人望つてやつはかなりのものだし、あれはあれでいい会長になると思うよ……たぶん」

「そうですか。もう一つ質問してもよろしいですか」

「どーぞ」

「あのお二人とあなたは、どういった関係ですか。ただ面識があるだけではなさそうでしたが」

その疑問はもつともだろう。彼らのことを詳しく知らない人間から見たら 推測するしかない彼らの関係に軽く混乱をきたすのは明白だ。高雄と榛名は男女間を越えた仲の良さ……馴れ合いを見せ

ている一方で、高雄と深雪では冷戦状態。犬猿の仲にしか見えないのだから。

彼女からの疑問で高雄はふと昔を思い出し、その言葉をぼそりとつぶやいた。

「…………お城組<sup>しろぐみ</sup>」

「すみません、よく聞こえませんでした」

「あ、いや…………なんでもない。うーんとね、幼馴染なんだ。僕達三人」

それはまぎれもない事実である。それぞれの自宅こそ離れているが、彼ら三人は幼少時からの幼馴染。女子でありながら男勝りなガキ大将であつた榛名に、深雪と共によく引きずり回されていたのを覚えている。それはそれで楽しい思い出はあるが。

「そうでしたか。どうりで」

「うん…………あれ？ それだけ？」

「あまり突っ込んだ質問をするのも失礼かと思うので、今のところこれ以上詮索する気はありません。話したいというのなら拝聴させていただきます」

「いや、いいや…………また機会があつたら　って、もうこんな時間か」

ふと時計を見れば、時刻は午後六時の数分前。もう間もなく下校時刻を知らせる鐘の音がスピーカーから響いてくる時間だ。彼の言



葉で朝日もそれに気付いたらしく、本をそつと閉じて席を立った。そしてほとんど足音を立てずに高雄のもとへと歩み寄る。

「えーっと……もしかして、またその本を？」

「お願いできますか」

「……はい。読まずに預かるときます」

もはや最小限のコミュニケーションで意思疎通が可能……そして昨日と同じように、明日の放課後までということとで高雄は朝日からその本を預かることとなった。

「ありがとうございます。それでは失礼します」

彼女はまた丁寧にお辞儀をし、音のしない早足で図書室を出て行った。

広い図書室内に一人残され立ちすくむ高雄の姿は、マネケな絵づらのように少しだけ滑稽である。

「……帰ろつか」

誰かいるわけでも、誰に言うわけでもなく彼はつぶやき、室内の後始末と帰り支度を済ませて図書室を後にする。

その日の帰り道で身に受ける北風はいつも通り冷たく、どこか寂しさを感じられるものであった。

## F e n n e l

放課後の時間をつかつて朝日が読み解こうとし、下校時刻になると高雄が彼女の代わりにそれを預かり、そして翌日の放課後に彼女へと返す。そんな行為の繰り返し、もはや日課のようなものとなつて数日が過ぎた。

二人しか居ない、外の風音と内のストーブ音のみが響く空間。今日も高雄はカウンター内で、朝日はテーブルの最端で。それぞれ、手元の本に視線を向けるだけの時間が過ぎていく。しかし高雄の意識だけは、時折彼女の様子を眺めることにも向けられていたが。

(……飽きないのかな)

彼は素直にそう思う。朝日の様子は。彼女が今日もこの図書室へと訪れ、彼が預かつていたあの本を受け取り、定位置の椅子へと座つてページを開いたきり。固まったかのようにまったく動きが見られなかった。

無論、まばたきであつたり垂れ下がった髪を手ぐしで直すといった動作こそあれど、『テーブルに着いて一冊の本を読む』という主な動作に変化が見られない。微動だにしないその表情と彼女の雰囲気相まって、それはまるで氷の彫像のようである。

だがなによりも彼がそういう疑問を抱いたのは、彼女があの本のページを一向にめくる気配がない為。それはどういふことが。要するに彼女は、初めに開いた見開きのページだけを凝視している……それ以上読み進めている様子が全くないのだ。彼女がこの場所で、あの本を読むようになってから。

「コホン……あの、霧島……さん？」

「はい」

少しばかりの緊張を伴いつつ、高雄は朝日のもとへ近付いて彼女の名を呼ぶ。幸いなことに今回は一度目の呼びかけで高雄の方へと顔を向けてくれた。意図的ではないにしろ、声掛けを無視されなかったことに喜びと感謝を感じつつ、彼は疑問を口にしようとした。音もなく背後から迫る、アルコール臭に身を包んだ人物の気配には気付かずに。

「あのさ、その本のことなんだけ　どうおおおっ!？」

発言の途中で高雄はすつとんきょうな声をあげた　だが仕方ないだろう。背後から突然股間を握り締められるなど、予想出来ているほづがおかしいというものである。

「ぬっふっふー。この程度で騒ぐとは、まだまだ甘いのが少年……  
げえーっぶ」

かくして声の主　もとい、高雄の股間を鷲掴みにしている人物は加賀音羽その人であった。突然こんな行為に及ぶ事と、背後から撒き散らされる酒臭い吐息によって瞬時に誰であるのかは予想がついたが。

「ちよっ、先生どこ触っ　うわ酒くさっ!」

「ああにー?　こんな美人捕まえて、臭いたあ　いい度胸だなあ　  
イ　いい……うえーっぶ」

「い、いやそういうわけじゃ　　っていうかなに揉んでいやあああ  
あああ　……！」

彼女からの容赦ないセクハラ攻撃に、さすがの高雄も情けない悲鳴を上げざるを得なかった。まるで双方の性別が入れ替わったかのような襲い方と襲われ方である。だがそんな彼の反応が面白いのか不愉快なのか、高雄に対する彼女のセクハラと身体の密着度はさらに激しくなっていく。

こんな状況でも無表情のまま二人の様子を眺める朝日を前に、高雄は羽交い絞めの状態で床へと押し倒され　　どうにか逃れようとする高雄と、逃すまいとしてセクハラを続ける音羽との攻防が続く。

「ああん……？　全然大きくなってないじゃねーかダメエ……んなにあたしに魅力がないってくああっ！？」

「ドコ触ってナニ言ってるんですかあんたはっ！」

「だあれがアラサーの売れ残りだってえええっ！？」

「言ってるない！　言ってるませんからいやあああ……！」

常時泥酔状態が当たり前な音羽ではあるが、今日の彼女は特に酷い。高雄も必死に抵抗はするものの、残念ながら単純な筋力では彼女に軍配が上がってしまう。格闘技の最終ラウンドですらもう少しマシであろう、見るに耐えない組んず解れつな泥仕合　　まさに言葉通りの肉弾戦を朝日は無表情を崩さずに眺め続けている。やがて朝日は静かに席を立て、高雄へと質問した。

「お邪魔虫でしたら、おいとまさせていただきますが」

「ちょ、ちよつと待つ……！ 行く前に、この酔っ払いを引き離し  
ひいいいいいっ！？」

「うええーっへへへ。あんちゃん、いーいケツしとるのう……ヒツ  
ク」

「やはり私は邪魔なようですので、あとはお二人でごゆっくりどうぞ」

「待ってえ！ 霧島さんお願い助けてえええ……っ！」

「ヒヤッハー！ 脱げえっ！ 男だったら裸で語らんかーいっ！」

偶然にも図書室前の廊下を通りかかった女教師を朝日呼び止め、  
全員で音羽の身柄を拘束し場を治めるまでに十分以上の時間を消費  
するハメになった。

頭髮も制服も、あらゆる箇所が乱れて息も絶え絶えになっている  
高雄を他所に、その元凶である音羽は司書室のソファに寝そべって  
グッスリと夢の中。獣のように豪快ないびきを響かせている。

「……ごめんね？ いつも音羽が迷惑かけて」

「いいですよ……もう慣れましたから」

ため息混じりに諦めの表情を見せる高雄。そんな彼に、まるで自  
分のことのようにしっかりと頭を下げて謝罪している 朝日が救  
援として呼んで来た女教師は、伊吹和泉いぶきいずみという名の、社会科教員で  
ある。

飾り気のない実用性重視な眼鏡に、ふわりとしたナチュラルボブ  
の髪。ボディーラインこそ音羽と比べればさすがに見劣りしてしま

うが、それでも外見と内面から溢れ出んばかりに主張する柔らかで優しい雰囲気が見た者を虜にするのか、男子生徒からの人気はなかなかのものである。

音羽とは同期で同じ年の長い付き合いらしく、学園以外の場所でも二人一緒に行動している姿がよく目撃されている。もっともその目撃証言のほとんどが、自由奔放で歩く爆発物のような音羽に振り回され尻に敷かれセクハラされたりと、思わず助けに入りたくなるほど被害を被っている彼女の姿だが。

「実は今ね、来賓の人達が来ちゃって……ほら、職員室に立ち寄る可能性もあるじゃない？　なのにあの娘ったら、いつも通りにお酒をグイグイグイーってしてるもんだから……」

「それで追い出されてここに来たってワケですか」

「そうなの。わたしが同行ってことになって、とりあえず保健室に寝かせてただけど……他の先生たちと職員室に消臭剤まいてる間に、ドアを蹴り破って逃げちゃったみたいで……」

酔いつぶれた音羽をベッドへと寝かせた後で、保健室の扉は外から施錠した……しかしそれはティラノサウルスを二ワトリ小屋に閉じ込めたようなものである。目を覚ました音羽にとって何の障害にもなりはしない　それこそ電流付きの金網でも用意しない限り彼女を閉じ込めるというのは不可能だろう。そうなったとしてもどうにか突破してしまいそうなのが彼女の怖いところであるが。

「迷惑ついでなんだけど、あの娘をしばらく置いてもらえないかな？　下校時間まででいいから」

「和泉先生……安全装置の無い核兵器が隣の部屋にあるようなもん

ですよ？ しかも制御不能な自走機能付きの」

「ごめんねえ。わたしが付きっ切りで見張ってたんだけど……ど  
ーしても今日中にやらなきゃいけない準備があるの忘れちゃってて」

高雄は今日一番の深いため息をつき、仕方がないなという態度で和泉の申し出を了承した。皮肉を言いつつも本当は却下する気など最初から無かったのは、彼の人柄である。

「ありがとー。あのまま司書室で寝かせといてくれればいいからね？ でもエサは与えずに」

「動物園のパンダか何かですか……」

「あの娘の迎えと、ここの戸締りはわたしがやるから、高雄君はそのまま帰ってくれていいからね」

「はいはい。了解です」

「それじゃまた……あつ」

シャンプーやリンスか、それとも香水だろうか。癒される花のよ  
うない香りを残して図書室を後にしようとした和泉だったが、何  
か思い出したか言い残したことがあったらしく唐突に振り返った。

「高雄君は聞いた？ 例の事件……」

「ええ。帰りのホームルームで」

まだ事件と呼ぶべきではないのかもしれないが、隣町で年端もい

かない少女が突然失踪したという話である。

比較的治安も良く、穏やかな雰囲気くわいのしのこの地域 呉野市ではあるが、だからと言って油断していて良いというわけではない。現代の社会全体に言えたことではあるが……自分には関係のなさそうな事件や事故がいつ身近で起きたとしてもおかしくはないのだ。

「誘拐の可能性もあるし……隣の県でも通り魔事件が起きたばかりだから登下校時には気をつけるようにって、担任が言っていましたよ」

「そうよねえ。怖いよねえ……高雄君も、変な人についていたりしちゃダメだよ？」

「いや、僕よりもむしろ和泉先生が……」

「え？ わたし？」

「あ、いや……」

高雄は口を噤くんだが、その気持ちは至極当然なものである。男女という性別の違いもあるが、それよりも第三者から見たときの彼女は若くて美しく、少々気弱そうでどこかふわふわとしている……なにより学生服だってまだまだ余裕でイケるだろうという、ともすると幼く見えてしまう容姿なのだ。誘拐犯や通り魔が狙うとすれば、まず間違いなく高雄よりも彼女の方になるだろう。

「やだなあー。わたし、誘拐なんてしないよお？」

「いやそつちじゃなくて……まあいいです」



自身についてまったく無自覚なのか彼女の受け答えはやはりどこか抜けていた。カーディガンの袖口で親指が隠れてしまっている両手を、屈託の無い笑顔のままプルプルと振るその姿を見れば、彼女に心奪われる男子生徒や男性教員が多いのも何となく理解出来そうである。

「じゃあわたしは行くからお願いね。帰り道には気をつけて」

「はいはい。先生も」

短い挨拶を交わし、和泉はようやく図書室を後にした。小走りに近いがちょこちょことした歩き方は、音羽や榛名のような豪快さ溢れる足取りとは別次元のものである。

(……あ。そういえば霧島さんは……?)

はたと気付き、高雄は朝日の姿を探す。パツと見たところ図書室内に彼女の姿はなく、「もしかしたら帰ってしまったのかもしれない」という考えが一瞬頭をよぎるも、すぐにそれは間違いだということが判明した。

「……何をしてらっしゃるのです?」

「観察です」

朝日は司書室にいた。どういいうわけかソファで眠っている音羽の枕元にしゃがみこんでいる。

高雄が背後から話しかけても彼女は振り返らず、その視線は目の前で熟睡している酔っ払い教員の顔にのみ向けられ続いていた。

「本で読んだことはありませんが、『鼻ちようちん』という物をこの目で見たのは初めてです」

「……そうですか」

「んぐぐぐぐぐぐおぐぐがあああ……」

静かな室内に騒音レベルで響き渡る音羽のいびき声を耳に受けつつ、やっぱりこの少女は謎だと高雄はつくづく思う。

彼女の言う「鼻ちようちんの観察」が終了したのはそれから五分ほど後のことだった。

## Fennel 2

「聞きたいこと、ですか？」

「うん。……っていうか相談したいこと、になるのかな。この場合」

いつも通りに朝日からその本を受け取りながら、高雄は答える。  
時刻は夕方六時。下校の鐘と司書室で爆睡している音羽のいびき  
声が混じり、とんでもない不協和音が図書室に響き渡る中でのこと  
であった。

「と言いましても、おそらく私はあなたよりも人生経験が少ないで  
しょうから参考になるかどうか」

「いや、進路の相談じゃなくてね……」

「では老後についてでしょうか？ でしたら尚更、私のような若輩  
者ではなく」

「いやいや、これについてなんだけど……」

「ああ。この本ですか」

朝日は高雄へと渡した本 『「？」の童話』を見つめ、それか  
ら壁の時計をチラリと見て、答えた。

「そのお話、明日の放課後ではダメでしょうか？」

「んーと……それだと明日まで僕がモヤモヤしてしまうというか」

「そうですか。ムラムラしてしまうのですか」

「……それはわざと？ それとも奇跡的な聞き間違いですか？」

明確な悪意を持ってかどうかはさておいて、彼の質問を気にすることはなく彼女はもう一度時計の盤面を確認し、自身の下唇へと人差し指をつけた。そのジェスチャーから推測するしかないが、おそらくは時間を確認してから頭の中で何か検討しているのであろう。

「あ……もしかして急いでる？ 時間ない？」

「いえ。急いでいますが、時間はあります」

「……どゆこと？」

「家に帰ってからの予定はありますが、逆に言うと家に帰るまでの下校時間分は空いているということです。急いでいるというのは人を待たせていますので」

「あ、ああ。そういうこと……」

ならば仕方がない。彼女の言うように、明日の放課後まで待つか……高雄がそう思った時だった。朝日が突然、無表情のままその言葉を口にする。

「あなたのお家はどこですか？」

「……『犬のおまわりさん』？」

「童謡ではなく、純粋な質問です。あなたが学園を出た後の通学路、帰路についてお聞きしています」

「……えっと、商店街を抜けた先の住宅街に」

「商店街を抜けた先の交差点をどちらに？」

「み、右に行きますけど……」

「私の家は左に曲がった先です」

「は……はぁ。そうですか」

思わず、もしかしても彼は彼女の質問に敬語で返答してしまった。

「後輩相手に何を怖気づいているのか」と言う者がいるのであれば、実際に彼女と対話するべきである。きっと彼と同じような心境、同じような対応になってしまはずだ。

そんな彼の戸惑いなど関係なく、朝日はある提案を持ち掛けてきた。

「どうでしょう。よろしければ商店街を抜けるまで、一緒に」

「……え？」

「帰り道の途中まで同伴すれば、その間に私があなたからの質問と一つのに答えることが出来ます。歩きながらになります」

「えっと……それっ……って!？」

高雄は彼女の行動に驚き、半歩引く思いで軽く仰け反った。「ですが」と口になると同時に、至近距離までグイと近付いてきたからである。感情が全く移っていない両の眼で彼を見据えながら。

「私は構わないのですが、そのためにはあなたに少々協力していただく必要があります」

「え、えーっと……ぐ、具体的に僕は何をすれば……」

「携帯電話という物をお持ちですか？」

「け、ケータイ……？ ……えっと」

軽く慌てつつポケットをまさぐり、彼は自分の携帯電話を取り出した。一応スマートフォンではあるが、既に型落ちしてすっかり旧世代扱いされている代物である。もちろん携帯電話としての機能には何の不足もないので、今のところ特に不満もなく使用しているが。

「……持ってますけど」

「電話を掛けるために使用させていただきたいのですが、お借りしてもよろしいでしょうか」

「え……あ、ケータイを家に忘れてきたとか？」

「いえ。もともと所有していません」

一人で複数の携帯電話を所持することも珍しくないこの現代で、とんでもない天然記念物もいたもんだと彼は素直に思った。彼女はおそらく、この学園内なら片手で数えられるほどの希少種か絶滅危

慎重にカテゴリーされるだろう。

「そ、そう……いいよ。使って」

「ありがとうございます。お借りします」

携帯電話を手渡したところで、ようやく彼女は密着寸前の至近距離から離れてくれた。べつに何が起きるわけでもないと分かっていたとはいえ、高雄はホッと胸を撫で下ろして深く息をつく。異性との予想外の接近というのは、どうしたって心拍数が上昇するものである。

だが朝日は一向に操作する気配を見せず、なぜか両手を使ってさまざまな角度から彼の携帯電話を凝視していた。まるで精密機器の検査現場のようである。さすがにその様子をただ見ているというわけにもいかず、「どうしたのか」と彼は尋ねてみた。

「これはどうやって開くのですか？」

「……開く？」

「以前クラスメイトが使用していたのを見たことがあるのですが、たしか二つ折りで通話時には開いていた記憶があります」

「……………」

高雄は言葉を失い少しだけ固まったが、すぐにこれがフラットタイプのスマートフォンという機種であり開閉機能は無いこと、さらにタッチパネルによる操作を主体としていることを手早く簡単に説明した。

人によっては彼女に対し呆れかえるか、ひょっとしたら憤りを覚

える者もいるかもしれない……しかし高雄はそのどちらでもなかった事実を受け止めてそれに応えた。彼女がどんな環境で育ってきたのかは分らないが、知らないなら仕方ないのだから、と。

説明を受けた朝日は、まるで時限爆弾でも解体するかのように慎重な手つきで番号を入力していく。幸いにして電話はすぐに繋がったらしい。

「もしもし、朝日です。いえ、偽物ではなく本物です。はい？ いえ。怪我也事故もしていません。今は学園の中ですがこれから帰るところです」

（いきなり疑われて猛烈に心配されとる……）

「申し訳ありませんが、今日は私を待たずに先に帰っていてください。はい。え？ そうですか、わかりました」

（……終わったか）

「ありがとうございます。お返します」

「どういたしまして……」

一体どんな通話内容なのかと気にはなったが、さすがに口に出して訊くのは憚<sup>はばか</sup>られる。高雄はあまり深く考えないようにし、朝日の手から携帯電話を受け取った。

「一つ、お聞きしてもいいでしょうか」

「ん……なに？」



「帰り道で、あなたは私を襲いませんよね？」

「ぶふっ!？」

吹いた。

特に飲み物を口に含んだりはしていなかったが、目の前の少女からのトンデモ発言に高雄は驚愕し、下を向いて盛大に吹いた。鼻水までちよつとだけ垂れてしまったほどである。もし何かを飲んでいる最中であつたなら涙目でむせるか、夕陽に照らされる鮮やかで小さな虹を口元から出現させていたに違いない。

「えっ……いや、なに？ どういうことっていうか……いや、そういうことなんだろうけど、なんで？」

「もし道中で男性に襲われたなら、すぐに連絡するか近隣住民の方に大声で助けを求めるようにと言われました」

「……恐竜が蘇るくらいの奇跡が起きても襲いませんので、大丈夫です」

「そうですか。わかりました」

女子に触れるどころか、接近するのすら恥じらいを感じる年頃。加えて「そんなことをするほどの甲斐性はない」と彼は思ったが、口に出してしまうとなんだか自分自身が惨めになるような気がしたので止めておいた。

「……よし。それじゃ行こうか」

「そうですね」

今日に限っては図書室の施錠をする必要がないため、帰り支度が終わるのは早いものだった。カバンを持ち、二人揃って廊下へと…出る前に高雄はハッとして踵を返した。

「どうしました？」

「ごめん。ちょっと待ってて……」

司書室にて眠れる獅子……もとい、音羽の様子を確認する。下校した後のことは和泉に任せていいとはいえ、なにせ相手が相手だ。念を入れておくに越したことはない。

「……よし。寝てるな」

「寝ていますね」

「ん……ぎぎぎぎぎい……」

いびきが治まっているかと思えば、今度は歯軋りのオーケストラが始まっていた。耳障りなその音は、子どもが泣き叫ぶ歯医者でのドリル音に匹敵するものがある。そして未だに彼女の鼻には、小さな笑いの神が舞い降りていた。

「あの鼻ちようちん、指でつついてみたいのですが」

「絶対にやめてくださいお願いだから」

触らぬ邪神に祟りなし。

たとえトイレの床に額をこすりつけて土下座するハメになろうが、

それだけは何んとしても阻止しなければならぬと高雄は覚悟を決めて懇願する。

だが朝日は「言ってみただけです」とのこと、あっさり引き下がってくれたため事なきを得たのだった。

いよいよ彼らが図書室を離れ、廊下をしばらく進んだところで高雄は「肩の荷が降りた」と胸を撫でて深呼吸をする。

「核爆発が起きる前に帰れてよかったよ……」

「あの部屋に核兵器が置かれていたのですか？」

「もののたとえだよ……あの酔っ払い美人教師のこと」

「なるほど。そういうことですか」

高雄が前を、朝日が後ろを。雑談を交わしつつ二人は階段を下りていく。

踊り場の天窓から覗く空の色は、夕焼けの赤を通り越してすでに夜へと移りつつあった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4681z/>

---

としょコイ。～閉店営業図書室と、集いし若人たち～

2012年1月14日19時50分発行